聖徒の道 4 1975

1975　4月号

末日聖徒イエス・キリスト教会

大管長会

スペンサー・W・キンボール
N・エルドン・タナー
マリオン・G・ロムニー

十二使徒評議員会

エズラ・タフト・ベンソン
マーク・E・ピーターセン
デルバート・L・ステイプレー
リグランド・リチャーズ
ヒュー・B・ブラウン
ハワード・W・ハンター
ゴードン・B・ヒンクレー
トーマス・S・モンソン
ボイド・K・パッカー
マービン・J・アシュトン
ブルース・R・マッコンキー
L・トム・ペリー

諮問委員会

J・トーマス・ファイアンズ
（内務伝達部長）
ジョン・E・カー
（配送翻訳部長）
ドイル・L・グリーン
（教会誌編集主幹）
ダニエル・H・ラドロウ
（教会教課企画調整主任）

国際機関誌編集主幹

ラリー・ヒラー

日本語コーディネーター

八木沼　修一

もくじ

多く与えられる者は多く求められる……ボイド・K・パッカー…… 145
断食の律法……スターリング・W・シル…… 149
両親の学びの家……ロジャーおよびリベッカ・メリル…… 151
聖典を調べる……ロバート・J・マシューズ…… 156
地の果てまで…… 159
息子へ……S・デルワース・ヤング…… 162
ヨナ……ジョン・トゥベットネス…… 164
聖霊の賜…… 165
いちばんよいものとわるいもの……ドロシー・レオン…… 166
マークのために……キャロライン・グルークナー…… 168
フィジー諸島の友だちの話…… 171
おもちゃばこ…… 172
汝がパンを投げよ……リチャード・H・クレイクラフト…… 173
断食の律法……ヘンリー・D・テイラー…… 174
若者よ伝道の備えを……A・セオドア・タトル…… 176
私たちの大切な家族……ローレン・C・ダン…… 178
信仰の戦いに雄々しくあれ……ブルース・R・マッコンキー…… 181
なぜ引き延ばすのか……ニール・A・マックスウェル…… 184
神を知る……ハワード・W・ハンター…… 187
ローカルニュース…… 190

聖徒の道 4月号

発行所　末日聖徒イエス・キリスト教会
東京都港区南麻布5－8－10
配　送　東京ディストリビューション・センター
東京都港区南麻布5－10－25
定　価　年間予約1,700円　1部 150円
海外予約2,200円

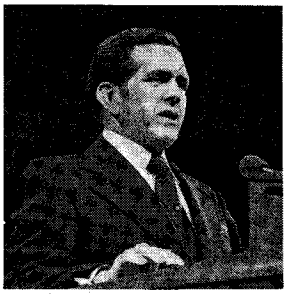
INTERNATIONAL MAGAZINES Printed in Japan

1974年10月6日（日）半期総大会
午前の部における説教

多く与えられる者は多く求められる

イエス・キリストの福音は改宗者の生活に比類ない喜びをもたらす

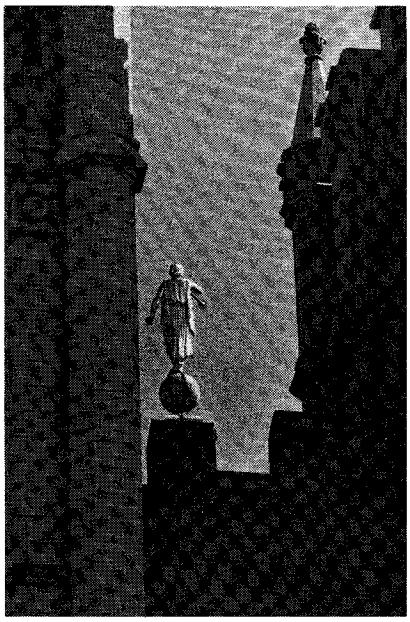
十二使徒評議員会会員
ボイド・K・パッカー



私は今日、福音を分かち合うという私たちの責任について、まだ主の教会の会員となっていない方々にお伝えすると同時に、教会員の方々にはそれを思い起こしていただきたいと思っている。

3週間前、私がニューヨークの空港でヨーロッパ行きの飛行機を待っていたときのことである。航空会社の従業員が席を立ち、座っている私の所につかつかと歩み寄って来て言った。

「私の甥がふたり、あなたの教会に入っているんですけど、教会に入ってからのふたりの生活の変わりようといったら私にはとても信じられないほどです。」 ほんのつかの間の会話であったが、私は、甥子さんが教会に入ったことについてその母親である彼女のお姉さんがどう思っておられるか尋ねて



みた。

「姉は大変な喜びようでした。」そう言うと、彼女は家族がふたりの息子のことをどんなに心配していたか話してくれた。それは彼らが、タナー副管長が語ったような迷える者であったからである。「ふたりがどんなに変わったか信じられないほどですわ。長い髪をバッサリ切って、まるで人が変わったようです。」彼女はそうつけ加えた。

それから、私が搭乗しようと席を立ったときにも、彼女はもう一度私に感謝して「皆さんがどうしてそのように変わられるのかわかりませんわ」と言った。

彼女の疑問に答える意味で、私たちがなぜ高い標準を維持するかということについて一言説明させていただきたい。それは福音の原則が錨となり避け所となるからである。プログラムや手段、方法が変更されることはあっても、標準が変えられることはない。それだからこそ私たちは導かれ守られているのである。

私たちは人々に福音を分かち合おうと絶えず努力を重ねてはいるが、人々の好みに合うように福音を変えることはできない。標準は私たちが定めたのではない。主が設けられたものであり、この教会は主の教会なのである。

まだ主の教会に入っていない方々にお願いしたいことがある。もし私たちの分かち合おうとする態度があまり強引すぎるようであれば、容赦していただきたい。福音を分かち合わないと、福音を失ってしまうことになるからである。それは福音を維持しようとする場合のひとつの要素なのだから。それ故、伝道は通りいっぺんのものではなく、非常な決心を要するものである。

あなた方は現在世界中で1万8千人以上の宣教師が全時間を伝道に捧げていることを御存知だと思うが、そのうち21歳以上の者はごくわずかで全体の5パーセントに満たない。

これは伝道が活気に満ちた、また若人に強く訴えかけるというふたつの面を持っていることを物語っている。若人が2年間にわたる楽しく若さあふれる青春の日々を放棄して、自分の人生の一部を福音を宣べ伝えることに捧げるには、確信が必要である。

しかし、彼らが伝道の業を成し遂げても別に不思議ではない。なぜなら、彼らは真理を教えているからである。この教会は主の教会だからである。主は御自ら宣言して「全地の面に於ける唯一の真にして生命ある教会」（教義と聖約1：30）と言われた。

しかしながら、私たちの懸命な伝道にもかかわらず、この教会に入るのは容易なことではない。世間一般の人にとっては、ほとんど全面的な生活の転換が求められるからである。教会に加わろうと加わるまいと、あらゆる転換は生活の著しい進歩を意味するのだが、それでもある人にとってはこれが大きなチャレンジとなる。

例えば、教会に入るためにはあらゆる不品行を捨て去らなければならない。また夫は妻に、妻は夫に貞節を尽くすという誓約のもとに置かれる。また若人は生命の源となる聖なる力を結婚のときまで抑制するよう求められる。

信頼できる家族関係は教会の大きな理想なのである。

自制心が必要とされる。教会員はいついかなる時にあってもアルコール性飲料は一切飲用しない。タバコについても全く同じことが言える。たとえたくさんの量でなくとも、習慣性となる茶やコーヒーなどの興奮性飲料を用いてはならない。このことから当然、睡眠薬に対する私たちのあり方も理解していただけると思う。また言うまでもなく明らかである。

改めるべき点が多々ある。例えば、謙遜であり、正直であり、敬虔であり、安息日を守ることなど、これらはすべて私たち一人一人を立派な人間にしてくれる。

再び申し述べたい。活発な伝道活動にもかかわらず、この教会の会員となる資格を得るのは決して容易なことではないし、いったん入ったとしても決して安易な道ではないのである。もっとも、安楽な教会を求めており、それがあなたにとって重要だとしたら、この教会はそのようなものではない。

数年前、ある伝道部を管理していたときのこと、ふたりの宣教師がすばらしい家族を教えていた。すでにその家族はバプテスマを受けたいという希望を述べていたが、それからやにわにその気持を失ってしまった。什分の一についてのレッスンを受けてから、父親はそれ以後の宣教師との集会を全部取り消してしまったのである。

がっかりしたふたりの長老は、支部長（彼は改宗してまだ日が浅かった）にそのことを報告し、このすばらしい家族を支部に迎えられなくなったと告げた。

数日後、支部長は長老たちに話して、その家族をもう一度訪問するとき自分も同行させてくれるように頼んだ。

「教会には入らないことになさったそうですね。」支部長は父親に話しかけた。

「その通りです。」

「長老たちから、あなたが什分の一のことで混乱していらっしゃるということを聞きました。」

「ええ、そうなんです。それまで宣教師の方は什分の一のことについて話してくださいませんでした。それでそのことを知ったときに『什分の一なんてあまりにも多くのものを要求し過ぎる。今まで一度だってそのようなこと

は求められたことはないのに』と言いました。什分の一とはあまりにも多過ぎます。ですから、教会には入れないんです。」

「断食献金についてはお聞きになりましたか？」支部長は尋ねた。

「いいえ。それは何ですか？」

「私たちの教会では毎月2食、食事を断ってその食事に相当する金額を貧しい人のために差し出すのです。」

「そういうことについて宣教師の方は教えてくださいませんでした。」

「では、建築資金についてはお話しましたでしょうか？」

「いいえ。それは何ですか？」

「教会ではみんなで助け合って礼拝堂を建てます。ですから、もしあなたも教会にお入りになっていれば、金銭、労働両方の面でそれに参加したいと思われるでしょう。ついでながら申し上げますと、今私たちは新しい礼拝堂を建築中なんですよ。」

「初めて伺いました。でも宣教師の方はお話しになりませんでしたよ。」

「福祉プログラムについては説明しましたでしょうか？」

「いいえ。どういうことですかそれは？」

「そうですね。私たちはお互いに助け合う必要があると考えています。もしだれか経済的に苦しい人や病気の人、失業している人、困っている人がいれば、私たちはいつでも援助の手を差し伸べることができるのです。教会にお入りになれば、あなたにも援助していただくことになると思いますが。

また、私たちの教会には専門の聖職者がいないということについてはお話したでしょうか？　私たちは皆、それぞれの時間と才能と金銭、すべてを捧げて奉仕します。しかし、それに対して金銭的な報酬は一切受けないのです。」

「そういうことは初めて伺いました。」父親は言った。

「そうですか。」支部長は続けた。「什分の一のようなほんの小さなことで心が変わるようであれば、はっきり言って、あなたはまだこの教会に入る準備ができていません。あなたの判断は正しかったと思います。まだお入りにならない方がよいでしょう。」

支部長は宣教師と共にその父親のもとを辞したが、後からひとつのことを思いつき、すぐさま引き返して言った。「あなたは人々がなぜこういったことを皆喜んで行なうのか不思議に思ったことはありませんか？　私はこれまで什分の一のことで請求書を受け取ったことは一度もありませんし、だれかが呼びかけて集めるのでもありません。でも私たちは什分の一を納めるのです―それにその他のものも全部。そうすることは大きな特権であると考えているのです。

なぜかその理由がおわかりになれば、あなたは主が言われた商人のように、行って持ち物を皆売り払い、高価な真珠を買うことでしょう。」

「しかし」　支部長は言った。「それはあなたがお決めになることです。私はただ、あなたがそのことについてお祈りしてみて下さればと思います。」

数日後、その人は支部長の家を訪れた。無論、宣教師との約束を再び取りつけに来たのではなかった。それはもう必要なかった。彼は家族のバプテスマの日を決めに来たのだった。その家族は祈っていた。ひたすら熱心に祈りを捧げていたのである。

こういう出来事は、高い標準に引きつけられる個人、あるいは家族の中に毎日起こっている。彼らはそれを拒まないのである。

私たちは、この地上において最も偉大なものを自らの管理するものの中に有している。それは何かと問われれば、もちろん、主の戒めをすべての面において守ろうとすることである。こうした高い標準から来ることで、実際問題としてただひとつ困るのは、教会が急速に発展し、しかも止まることを知らないということである。そのため私たちは絶えず気を配り、教会を各人の益となる小規模で効果的なユニットに保つように心がけてきた。

標準を守ることに困難を覚えている教会員でさえ（実際にこのような会員がいるのだが）、それらの標準を擁護しようとするのである。教会に入った人が世のものでなくなるためには、古い会員も新しい会員と同様にフェローシップを受け、訓練される必要がある。

「天国は、良い真珠を捜している商人のようなものである。

高価な真珠一個を見いだすと、行って持ち物をみな売りはらい、そしてこれを買うのである。」（マタイ13：45, 46）

さて、あなた方の中で、世のものを断念したりそれまでの習慣を変えることが極めて骨の折れることであると考える人がないように、私は英国初の女性下院議員となったナンシー・L・アスターの言葉を借りて再度申し上げたいと思う。

彼女は老いるということを非常に恐れていた。しかし自分もそのような身になるに至って、人生を達観し次のように述べた。「私はいつも年を取るのを恐ろしく思っていました。なぜって、年を取ってしまうと自分のしたいことが何もできなくなるからです。しかしそれも、自分でしたくないと納得していればそれほど悪いことではありませんけど。」

私は、まだ教会に入っていない方々に申しあげたい。皆さんは福音を受け入れる必要はないが、私たちは皆さんに福音を勧めなければならないと。これまで皆さんに福音を受け入れる機会を提供してきたこと、そこに皆さんにとっても私たちにとっても非常に重要な意味を持つ何かがあるのである。福音はそれを拒む者にも受け入れる者にも真実であり、どちらも福音による裁きを受けるものである。

さて、ここで教会員の方々に、福音を分かち合うという義務について思い起こしていただくため、教会歴史の中からひとつの話を取りあげてみよう。

1850年代も後半、ヨーロッパから渡って来た多くの改宗者は、苦闘を重ねながらグレートソルトレークの盆地目ざして進んでいた。彼らの多くは非常に貧しく、無蓋の馬車を買う余裕がなかったので、わずかばかりの家財を手車に積み、引きながら歩かなければならなかった。これら手車を引いた開拓者たちは、教会歴史の中でも最もいたましく悲惨な出来事を経験したのであ

った。

マッカーサー兄弟の率いる一行も例外ではなかった。同行していた英国の改宗者アーチャー・ウォルターズは、1856年7月2日、日記に次のように記している。

「パーカー兄弟の6歳になる坊やが迷子になった。それでパーカー兄弟は息子を捜しに引き返した。」(ルロイ・R・ハーフェン、アン・W・ハーフェン共著、*Handcarts to Zion*「手車でシオンへ」P.61)

アーサーは、ロバートとアン・パーカーの間に生まれた4人の子供のうち、下から2番目であった。3日前、一行は突然の雷雨の中であわただしくテントを張った。アーサーの姿が見えなくなったのはそのときだった。両親は、彼がほかの子供たちと一緒に遊んでいるものとばかり思い込んでいたのである。

その日の早い時間に、一行が足を休めたとき、小さな男の子がやぶの陰に腰を下ろして休んでいるのを見たという者が現われた。

小さな子供をお持ちの方なら、疲れ切った6歳ほどの子供が焼けつくような夏の日にどんなに早く寝ついてしまうか、またどんなにぐっすり寝入ってしまうか、よくお分りになると思う。キャンプが移動する位の音では目も覚めないのである。

2日間、一行はそこに止まり、兄弟たちは全員アーサーを捜索した。そして7月2日、他に取るべき手段もなく、一行は西へ向かうよう命じられた。

日記によると、ロバート・パーカーは再び幼ない息子を捜してひとり引き返した。彼がキャンプを発つとき、その妻はあざやかな色の肩掛けを夫の肩にかけてピンで止めながら、次のように言った。

「もしアーサーが死んでいたらこの肩掛けをかけて葬ってあげてください。そしてもし生きていたら、これを旗にして合図してください。」

ほかの幼ない子供たちと共に、彼女は手車を引きながら懸命に一行について行った。

毎夜、アンは道に出ては見守った。7月5日、夕暮れ近く、彼らが見つめていると、見えた。東の方から人がやって来るのが見えた。間もなく、アンは沈む夕日に照らされて、あざやかな真紅の肩掛けがかすかに目に入った。

日記には次のように記されている。「アン・パーカーは哀れにも、砂の上にへなへなと座り込んでしまった。そしてその夜、彼女は6日振りにぐっすりと眠ることができた。」

7月5日、ウォルターズ兄弟はこう記している。

「パーカー兄弟が迷子になっていた息子を連れてキャンプに到着すると、キャンプ中が大きな喜びに包まれた。母親の喜びたるや、筆舌に尽し難いものであった。」(ハーフェン著「手車でシオンへ」P.61)

私たちは詳細をすべて知っているわけではない。名もない森の住人(そのような人がいるなどとても考えられないと、私は幾度も不思議に思ったが)がその幼い男の子を見つけた。そしてその子を病いと恐怖で参っているものと思い、父親が見つけ出すまで世話をしていたのであった。

この当時としては、ごくありふれた物語はここで幕となるのだが、私たちにひとつの質問を投げかけている。もしあなたがアン・パーカーの立場にいたとしたら、幼いわが子を救ってくれた名もない森の住人にどのような思いを抱くであろうか。限りない感謝の気持を抱くのではないだろうか。

この思いを理解すること、それは御父がその子らのひとりを救おうとする私たちに寄せてくださる感謝の気持を幾分なりとも感じ取ることである。感謝の念を抱くことそのものが賞賛をかち得るに値する。なぜなら、主はこのように言っておられるからである。「而して汝らもし生涯今の世の人々に向いて悔改めを叫ぶことに力を尽し、唯一人の人たりともわれに導かば、わが御父の国に於て彼と共に汝らの悦び如何ばかりぞや。」(教義と聖約18:15)それもさることながら、唯一人の人が私たち自身であったなら、と私はつけ加えたい。

それ故、私たちは万人に向かって来たれと訴えるのである。**私たちがあ**なた方をこの世から呼び集**めるのは**、得ることのできるものがある**からではな**い。それよりも与えることの**方が多い**からである。あなた方はこの**教会で必**要とされている。できるならば**家族ぐ**るみで、またそれが不可能でどうしてもと言うのであれば、ひとりでお**入り**になっていただきたい。

この教会には御父があなた方に与え得るすべてのものがある。しかし代価を払わずして受けることはできない。「多く与えられた者からは多く求められ」(ルカ12:48)るからである。

この教会は主の教会であり、そこに属するあなた方があらゆる人々から認められることはない。多くの人、否、ほとんどの人は、あなた方を変わり者だと見るであろう。中には理解し、受け入れることの容易でない教義もある。また標準も高い。しかし、あなたの今ある状態から出発できるのである。

あなた方の中には不幸や心配事、罪のために苦しみの荷を背負っている方がいるであろう。また品位を落とすようなよくない習慣にとらわれて苦心惨たんの人、孤独や失望、失敗と戦っている人も数多くいるであろう。また中には、家庭の不和や失恋、結婚生活の破綻などで苦しんでいる方もいよう。

私たちはこれらのことでつまずきはしない。それらはすべて退け得る、すなわち克服できるのである。あなたがだれであろうと、また何者であろうと、私たちはフェローシップの手を差し伸べよう。そうすれば私たちは相互に高め合い、他の人々を高めることができるのである。

この教会は主の教会である。私はイエスがキリストであり、現在も生きておられるという証を持っている。イエスをおいてほかに世の影響を及ぼす人物はいないと一般に言われている。私はその御方がイエス・キリストであり、神の御子、御父の生みたまいし独り子であることを知っている。またイエスが骨肉の体を有しておられることを証する。まさしくこの教会は主の教会である。イエス・キリストのみ名により証申しあげる。アーメン。

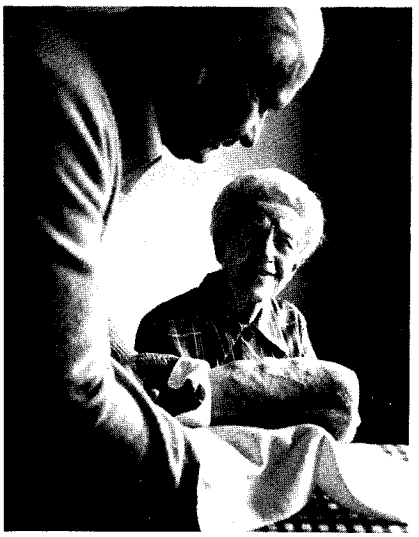
断食の律法

十二使徒評議員会補助
スターリング・W・シル

私たちが互いに励ましあって、成功と幸福の鍵を握る大切な律法を守るということは、教会の仕事のうちでも最も大切なものの中に数えられる。もしも私に説得の力が十分備わっていたら、教会の内外を問わず、世のあらゆる人に、断食の律法を守るよう説き勧めるだろう。

ヘンリー・C・リンク博士はあるときこのように語った。「健全な原則に従うこと以上に、人の生活に秩序をもたらすものはない。」 あらゆる原則のうち最も健全なものは、イエス・キリストの福音の原則である。もしも私たちが守るべき原則に従うならば、より良い人間となり、霊のことにもこの世のことにも一層の繁栄を見るであろう。ところが時折私たちは、これらの大いなる永遠の律法をさほど重要ではないもの、自分にとってはあまり大事でないものと考えることがある。ここで私は、なぜ私たちが断食の律法を正しく守るべきなのか、大切な理由を6つお話したい。

「われまた汝らに一つの誡命を与う。すなわち、汝ら今より後祈りと断食とを続けて行うべし。」（教義と聖約88：76）



そのうちで一番大切な理由は、これが神の戒めだからということである。もし私たちが常に神に従うなら、しかも、それが正しいから、神がせよと言われたからという理由で神に従うならば、私たちは人生にあってすばらしい特性を伸ばすことができるであろう。自分はただ神に従っただけではない、神と一致したのだとは、ある賢人の言葉である。

2番目の理由、教会のプログラムに従って、私たちは毎月第一日曜日を断食日曜日とするように言われている。私たちは二食を抜いて、それに相当するお金を困っている人々に衣食や医薬品等の援助ができるように、監督に差し出す。そして祈りの家へ行き、自分の証を述べ、感謝を告げ、お互いに励まし、高め、霊感を与え合うのである。

私たちがしかるべき断食の捧げ物をきちんと差し出したならば、現教会員の内輪だけで、年間5千万ドル余りがだれかの役に立っているはずである。またさらに、今の生活水準でいけば、実際に断食献金を必要としている人々の用に供してなお、年額数百万ドルが余る勘定なので、将来の緊急事態のために十分な備蓄ができるのである。私たちが義務を完全に果たしさえすれば、各自からはごく少額の献金ながら、合計となれば莫大な金額に上る。

主は断食献金を納めることに対して、知恵の言葉についてと同様のことを言われるのではなかろうか。「今聖徒と呼ばれ、或いは聖徒と呼ばれ得る者にして虚弱なる者、およびすべての聖徒中最も虚弱なる者の能力に適応する」と（教義と聖約89：3）。 また、私たちが神から受けている数多くの祝福を思いやると、たかだか幾らにもならない食事代は捧げ物としてあまりにもさ

さやかなことに、顔を赤らめる思いであろう。それに気づけば、自分のしている断食や捧げ物を正しく行なおうと、すぐに反省もするはずである。主はそれを心から喜んで下さるであろう。また各教会員は今までにもまして栄えるであろう。

3番目の理由、断食は克己や自制を養う最も良い方法である。私たちは現代の誘惑について飽き飽きするほど繰返し聞いていながら、大勢の人がほんのささいな罪に負けてしまっている。自制を身につける最良の方法は、自制を実践することである。

ここ何年来、幾つもの調査で、モハンダース・K・ガンジーが今世代最大の偉人のひとりに挙げられている。彼はイギリスから独立を勝ち取ったインド解放の志士である。しかも死亡当時、インドはもとより、世界においても最も力ある人物と認められており、彼に続く人々がその名を、大聖という意味のマハトマと改称したほどだった。ところが伝記作者のルイス・フィッシャーは、ガンジーは初めからそのような偉大な人物ではなかったと主張している。ガンジーは自分を臆病者だと考えていた。暗闇がこわく、蛇が恐ろしく、人間がこわく、自分をも恐れていた。また彼は非常に怒りっぽく、大きな問題を幾つもかかえていた。

ガンジーはそのような性質から被る不利益を知って、ついに自己改造することを決意した。そして後に自分を自己改造者と呼ぶまでになった。

彼は鍛練のために何度も長期間にわたる断食をした。食欲を自制できなければ、もっと困難な人生の問題をどうして処理できるかと考えたわけである。彼は、「自分をコントロールできずに、どうして他人をコントロールできよう」と言った。フィッシャー氏の言葉を借りれば、世界はソクラテス以来ガンジーに匹敵する人物を生んでいないのである。彼は絶対とも言うべき沈着と自制を備えてすばらしい自己分析を行なった。

4番目の理由、断食は霊の力を伸ばす手段である。使徒たちが主に、自分たちが苦しんでいる少年から悪霊を追い出せなかった理由について尋ねたとき、主は、「……このたぐいは、祈りと断食とによらなければ、追い出すことはできない」（マタイ17：21）と言われた。祈りと断食とによって他の人人から悪霊を追い出せるのであれば、自分からも悪霊を追い出すことができる道理である。

5番目の理由、私たちは価値ある慈善事業に参加すべきである。イエスが言われたように、「あなたの宝のある所には、心もある……」（マタイ6：21）からである。

農夫は最も良い収穫物を翌年の種に取っておく。人生に投資するよりも多くのものを人生から引き出したいと考える人がいるが、イエスは「受けるよりは与える方が、さいわいである」（使徒20：35）と言っておられる。私たちが取るよりも多くのものを社会や人生に還元したならば、今よりもさらに幸せに、はるかに成功した人物となることであろう。

さて、私はここで、断食献金が立派な慈善事業であることの理由を4つほどあげてみたい。

1．献金は金額が意図通りに使われる。つまり、断食献金から経費が差し引かれることは皆無である。立派な慈善事業でも多額の運営費がかかっている現状だが、断食献金にはそれがない。

2．もとでがかからない。一般の寄付は自分の収入の中から出るが、断食献金は食費から出すので、穴埋めする必要がない。

3．この先自分が何年生き、その間どれだけ健康に幸せでいられることか、考えてみるとよい。

4．神にどれほど喜んでいただけるかを考えてみるとよい。マラキの言葉から、主のみこころがうかがわれる。「人は神の物を盗むことをするだろうか。しかしあなたがたは、わたしの物を盗んでいる。あなたがたはまた『どうしてわれわれは、あなたの物を盗んでいるのか』と言う。十分の一と、ささげ物をもってである。あなたがたは、のろいをもって、のろわれる。あなたがたすべての国民は、わたしの物を盗んでいるからである。」（マラキ3：8，9）当時什分の一と捧げ物を納めないことが神の物を盗むことと同じであったのなら、私たちがもし今それと同じことをすれば、とりもなおさず私たちは今神の物を盗んでいることになる。しかしそれを裏返せば、私たちは神に大いに喜んでいただくこともできるのである。

生活に秩序を与えるこれらの原則について、同時にそれが大きな益をもたらすことについて、私たちは自分の中に確固たる信念を培うことにより、最大の成功と幸福とを得ることができると言われている。

また、適切な指導と奨励があれば、全ワード部、ステーキ部、支部、伝道部およびすべての教会員はこの大切な主の律法を重んじてすばらしい成功を収めることができるようになる。

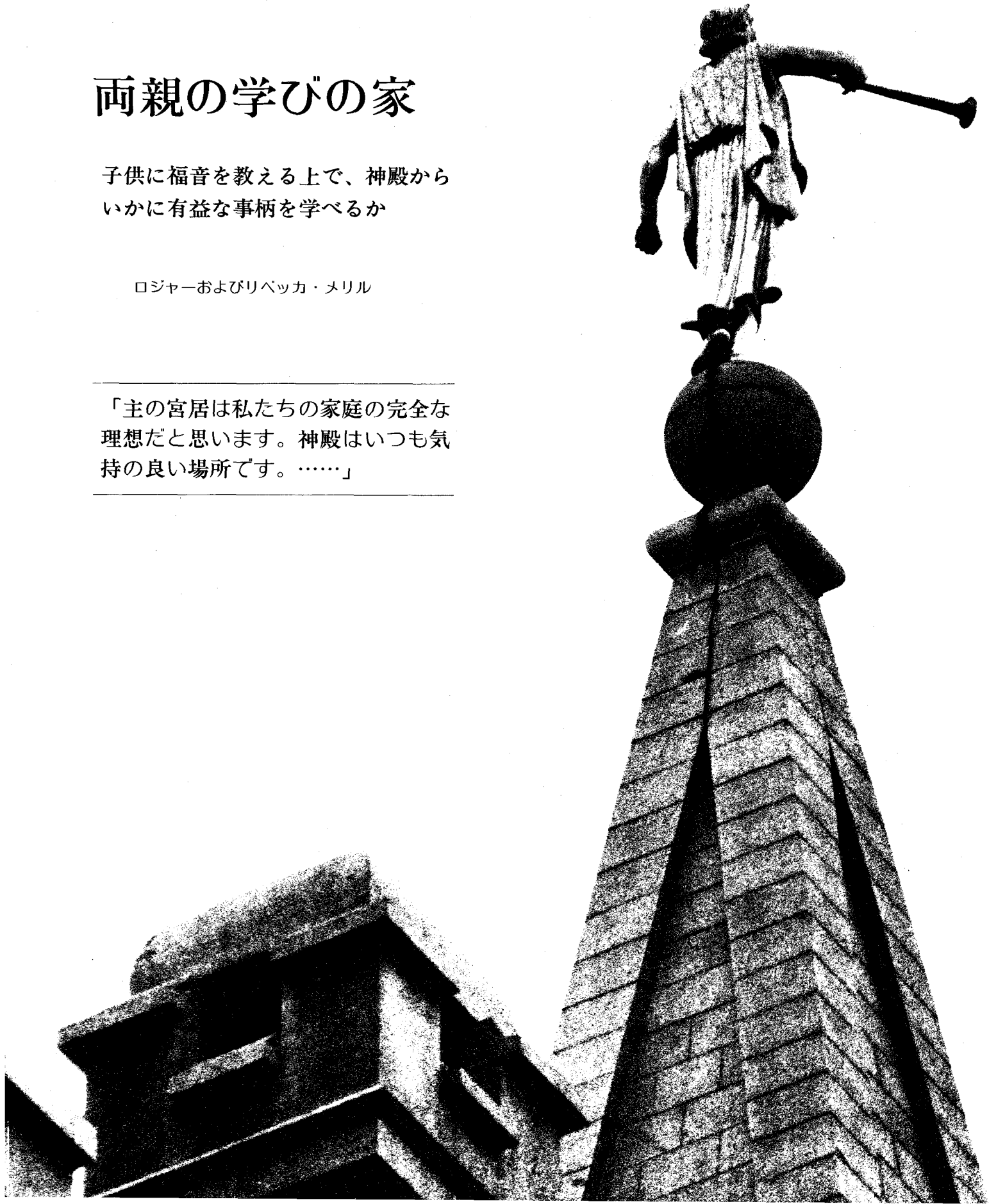
この断食の律法は養育掛の役目も果たす。私たちがこの律法を立派に守れるようになったら、他のどの律法もさらによく守ることができるであろう。この大切な律法を守った当然の結果として、信仰と力がおのずと備わるからである。

両親の学びの家

子供に福音を教える上で、神殿からいかに有益な事柄を学べるか

ロジャーおよびリベッカ・メリル

「主の宮居は私たちの家庭の完全な理想だと思います。神殿はいつも気持の良い場所です。……」



去年、神殿にもっと頻繁に入ろうという目標を立てたとき、それが日々の生活にこれほど大きな影響を及ぼすとは考えてもみませんでした。

学齢前の子が3人に、もうひとりの子がやがて生まれるというときで、子供を主に喜ばれるように育てたいという気持が日増しに強くなっている時期でした。私たちは目標と目的をはっきりさせたら、どんなことでもスムーズに上手にやり遂げようと頑張る方ですが、こと育児に関しては、目標がなかなか定まりませんでした。幼児教育の教室に出たり、心理学の本を読んだり、リーダーシップとマネージメントのテクニックを勉強しても、育児の問題には千差万別の解決法があることがわかっただけでした。

少年ジョセフ・スミスの例ではないですが、だれもが自分の方法こそが正しいと信じていて、白から黒までのさまざまな見解に、どうしてよいやらすっかりわからなくなりました。それで私たちは、「どの方法が正しいのだろうか」と真剣に考えるようになりました。

私たちが死者のための儀式を受けにたびたび神殿に行くようになったある日、突然のように、神殿で教えられる原則が言葉でも行ないでも実生活にとても役立つものだという思いに打たれました。そのことを考えると、主の宮居に私たちの家庭の完全な理想のあることがわかりました。天の模範に両親の理想の姿があること、そして聖典は、実際に子を持つ父として、神がどんなことをされたかという現実の話や模範が載っている完璧な教科書だということを知ったのです。

主はジョセフ・スミスへの啓示の中で、カートランドの御自分の宮居について指示を与え、家庭のあるべき神聖な姿を教えられました。聖徒たちに、「祈りの家、断食の家、信仰の家、学問の家、栄光の家、秩序の家、神の家」(教義と聖約88：119)を建てよとおっしゃったのです。この指示は私たちの家庭にもあてはめることができます。

主の指示に従えば、家庭を地上の天国のようにすることができ、そこには「神殿」の雰囲気が生まれます。

主の宮居はいつも清潔で気持の良い場所です。秩序というこの「天の第一の律法」は、家庭に平安な雰囲気を作り出すための神の標準です。家を清潔に美しく整えることは、つまらない仕事の繰返しではなく、もっと大事なことなのだということを家庭の主婦が認識したら、どんなにかすばらしいことでしょう。つまるところ、主婦は家族にとっては神殿の管理人なのです。主の模範に従って生活環境を秩序正しく整えれば、主婦は家族の生活を生き生きとした豊かなものにできるでしょう。

主の宮居は機能的です。神殿の設計、装飾、雰囲気、そこで行なわれている事柄は、どれも教えを施すという神殿の機能に添っています。各部屋には話がよく聞けるように座り心地の良い椅子が用意され、教えやすいように一番適当な所が取ってあります。また壁に絵が掛けてあったり、壁画や時にはフィルムなどの視覚教材もあります。それなのに、私たちの家庭には世の標準におもねたデザインや装飾が何と多いことでしょう。壁に掛かった絵や一番手近な本や家具の配置が、みんな私たちの価値観を反映しているのです。

神殿にはキリストのことを教えていないものは何ひとつありません。もし私たちの価値観を世よりも主に向けたいならば、家庭が神の方法に従うはずです。居間にある子供の本、黒板、掲示板、フランネルボード、あやつり人形の舞台、視覚教材のファイル、そしていつでも喜んで手伝ってくれたり、教えたり、自分でも新しいものを学ぼうとしている両親、それらがみんな学ぼうという雰囲気を盛りたてるのです。

主の宮居は主のみたまに満ちています。神殿に入るには、ふさわしいということを示す推薦状がいります。私たちも家に入る前にちょっと立ち止まって、愛する家族の待つ家に入るのにふさわしいかどうかを考えてみるとよいでしょう。主の宮居も私たちの家庭も共に、最良の自分と一番親切な行ないを示すべき場所なのです。粗野な言葉やけたたましい笑い声、押し合い、取っ組み合い、言い争い、のけ者などがあってはなりません。お互いに気を配り、助け合い、手伝うことに時間とエネルギーを使うべきです。

主の宮居は神聖な儀式を行なう場所です。家庭の夕べや家族の祈りを司会したり、病気の子供を祝福したり、子供を生み立派に育てる仕事と関係のあるこのような活動は、どれも家族をひとつにし、清めてくれます。故ハロルド・B・リー大管長は、神権者の一番大切な務めは自分の家庭の中にこそあると、幾度もおっしゃいました。

主の宮居は主の目的に添って建てられます。私たちは家庭でみんながいっしょにひざまずいたときや、主のみ業に献身したとき、大きな喜びを感じました。そしてこのことから、家庭で行なうことはみんな主に喜ばれることでなければならない、ということに気がつきました。また、このようにしてみわざに働くことで、家族のみんなは家庭のありがたさを今さらながら感じ、家庭を立派に保ちたいと思ったものです。

何にもまして、主の宮居が私たちの家庭の手本です。

いろいろな呼び方があるうちで、造

り主は御自分を「父」と呼ばせたいと思っていらっしゃいます。創造の初めから究極の行く末に思いをはせるとき、御父が私たちに不死不滅と永遠の生命を与えるという目標にすべての焦点を合わせておられることがわかります。従ってとりわけ、御父は親たちの手本です。御父は完全な御方で、何の誤ちもありません。永遠の真の原則によって子供たちを取り扱われますが、この原則は子を持つ親である私たちにもあてはまるでしょう。

「主の宮居も私たちの家庭も共に、
最良の自分と一番親切な行ないを
示すべき場所なのです。」

御父の模範を見れば、子供にどんなことを教えたらよいかがわかります。

親にとって最もやっかいなことのひとつは、何をめどにして子供を教えるかということです。子供が知らなければならない真理や話や律法や考えはたくさんあります。一体どこから手をつけたらよいのでしょうか。その解答は、御父が神殿の儀式によって教えて下さることの中に見出されます。

主の宮居で、私たちは順序正しく幾つかの誓約を交わしていきます。デビッド・O・マッケイ大管長はこう告げています。「神殿の『エンダウメント』というものがあるが、それは……人の永遠の旅路と無限の可能性と、愛に満ちた正義の御父が自分の姿に似せて造られた子供たち、すなわち全人類のために用意された進歩とに関する儀式である。このために神殿が建てられる。」（"*The Purposes of Temples*" 『神殿の目的』「エンサイン」1972年1月号〔英文〕P.41）

その誓約の順序が重要なのです。適当なときに一つ一つ律法が教えられます。成長の各段階における子供の自然な姿を学べば、典型的な子供の行動と、主が教えられた人生の律法との間に関連性のあることを知ってうれしく思うことでしょう。

児童心理学者の意見は詳細について異論はあっても、成長に最低4段階があることではおおかた一致しています。(1) まったく自己中心的な時期、(2) 事の結果を長い目で見たり意味を考えたりして決められるようになる時期、すなわち物事の分別がつく時期、(3) 体が大人になる時期、(4) 責任ある大人として独り立ちするための最終的な準備の時期、がそれです。この成長の段階と主の律法の両方を子供の成長の時点にあてはめてみれば、関連性がはっきりします。

(1) 自己中心的な時期

両親は幼児が本来持つ自己中心性を重々承知していますが、状況への対応のしかたについては両親も児童心理学者も意見はさまざまです。主の明快な計画の中では、末日聖徒の大勢の予言者や使徒がその勧告で強調しているように、幼児に、親に従うことや他人の幸福のために自分の欲求を抑えることを教えるのは大切なことです。

標準聖典の中では、特に聖書がそのような原則を教えるのに非常に役立ちます。旧約聖書に繰返し出てくる従順と犠牲の話は、この年齢の子供にうってつけです。

私たちが子供にこのことを教えようとしたとき、とてもよく理解してくれるのに驚いたり喜んだりしました。ある冬の寒い晩のこと、4歳になる息子が風呂あがりに、「お父さん、マイカを先にふいてあげてよ。ぼく犠牲になりたいんだ。ここに座って待ってるからね」と言うのです。

(2) 物事の分別がつく時期

子供が大きくなって主の前に責任が持てるようになると、遊び仲間の大きな圧力や正当化に負けないように、キリストを自分の土台とし、聖霊を伴侶とすることを福音の律法から学びます。聖書とモルモン経の中には、信仰、悔改め、バプテスマ、聖霊の賜の原則が美しい言葉で述べられていて、人生の目的やこの世の生活の大切さが語られ、それと同時にいつも正しい道を歩み、間違いを犯したときにはすぐに引き返すための計画も教えられています。

(3) 親となる準備

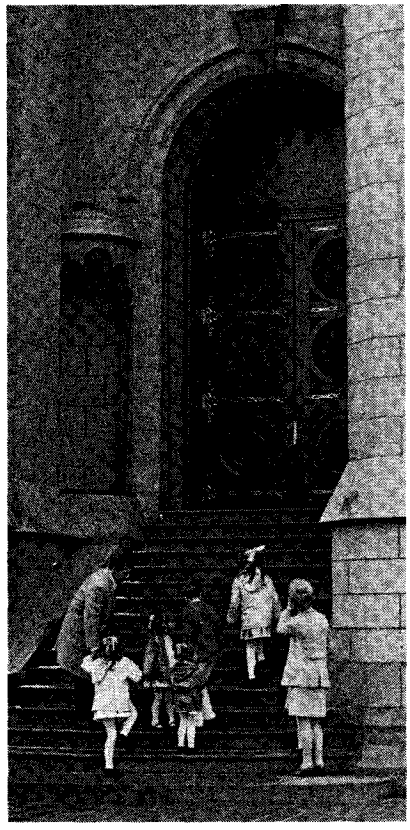
体が成熟し、交際も広くなってくると、誘惑が多くなります。しかし、純潔の律法に従えば、誘惑からすぐに身をかわすことができます。思春期には、親が言葉と模範で、体と霊を清く保つことのすばらしさを教えることが大切です。神殿のガーメントを参考にすれば、慎ましい服装とはどういうものか、はっきりと説明できるでしょう。

(4) 独り立ち

青年がさらに独立し、家の外で自分の能力を試す用意をする時期になると、教義と聖約に言われている主の奉献の律法から、なぜ自分に才能が与えられており、それをどうしたら一番生かせるかについて正しい見方ができるようになります。才能は、主の王国を建て、シオンを建設するために使う、主から与えられた管理の職なのです。

これらの原則を教える以上に、親が子供にしてあげられる良い準備がいったいあるでしょうか。子供が従順と、他人のために自分を犠牲にすることを学ぶとき、キリストを土台とした人生を築き、自分を導く聖霊を受け入れるとき、そして清く汚れのない生活を送って自分の持てるすべてを主のみ業に捧げるとき、その子は主のみ手の内の聖い器となる用意をしているのです。

私たちはこれまでに述べた律法のほかに、自分の望みが主の言っておられ



る枠を越えないように気をつけ、いつも主の導きを求め、絶えず体と霊とに栄養を与えることを常に心がけ、また子供にもそのように教えています。「皆そのひざを折りかがめ」、イエスはキリストであると告白する日がいつか来ることを知れば（教義と聖約76：110 参照）、子供も親も永遠の真に価値あるものを思い起こすことでしょう。また、今はどんな信条を持ってどんな生活をしていても、私たちの隣人はいつかキリストの神聖さを認めることがわかれば、何でも合理化しようという誘惑が少なくなります。

御父は整然とした方法で私たちに教えておられるので、私たちは子供に神のことをよく教えることができます。

御父の模範を見れば、子供にどのように教えたらよいかがわかります。

第1に、御父は**首尾一貫**して矛盾がありません。「われは昨日も今日もいつまでも同じ」と言っておられます。御父の子供である私たちは、御父が信頼できる御方であることを知っています。もし親である私たちが、庭仕事をほったらかしにして出かけた息子を日曜日には叱って、水曜日には叱らなかったら、あいまいさを植えつけるだけです。

第2に、御父は私たちに**戒め**を与えておられます。その戒めは私たちの理解力に従い、守れるような形で与えられていて、どれも永遠の律法の一端を示しています。ニーファイは、「……私は、主が命じたもうことには、人がそれを為しとげるために前以てある方法が備えてあり、それでなくては、主は何の命令も人に下したまわないことを承知している……」（Ⅰニーファイ3：7）と言っています。親は守れないような言いつけは与えないということを、子供たちに理解させる必要があ

ります。

以前私たちは2歳の息子に「道路に出てはいけない」と教えました。やがてその子も成長して5歳の兄と同じようなもっと高度の言いつけが守れるようになったので、「道路を渡るときには左右をよく見ること」と教えました。戒めは、それを守る能力が増してくるのにつれて変わります。しかしその基となる永遠の律法は変わりません。

主は戒めをお与えになるときに、エデンの園でアダムに言われたように、不従順の結果をもはっきりと説明されます。その結果は自然の因果であることもありますが、時には、神のみもとから切り離されるという永遠の罰を受ける前にその人が目覚めて悔い改めるように、主が飢饉や疫病、外敵といった罰を与えてさとして下さることもあります。

私たちは、子供が自分の行動の当然の結果を被るのを黙って見ていることもあります。しかし、助けてあげたり、別の罰を与えたりしてその結果から救ってあげなければならないこともしばしばです。交通量の激しい道路に飛び出したら、悲惨な結果が目に見えているからです。いずれにしろ、子供はあらかじめ結果をはっきり説明してもらえば、責任感と安心感を持ちます。

第3に、御父は私たちに**自由意志**を与えておられます。エデンの園でアダムに「食うと食わざるとは汝に任す」（モーセ3：17）と言われたとき、主はアダムに決定の責任を負わせたもうたのです。アダムに正しい原則を教え、自分自身を治めさせました。子供たちは、自分の下した決定に直接賞罰の結果があることをすぐに理解しますし、いったん教えたあとは、子供に与えた管理の職を尊重しなければなりません。その結果がはっきり説明されていれば、罰を受けるのも公正だと納得するのが普通です。

第4に、御父は私たちと**誓約**しておられます。親と子で約束を交わせば、いざ問題が起きたときでも対処のめあてがあります。子供が何かの仕事をするとか、あることを約束してその約束が果たせれば、一歩大人になりますし、自信も得ます。

第5に、御父は私たちに**管理の職**を与えて下さっています。私たちに責任を持つべきものを与えて、それをどう運用したか結果を報告するように期待しておられるのです。

私たちは、子供に自分の部屋を掃除するとか、ペットに餌をやるといった管理の職を与えたとき、その務めを尊重して、途中で取り上げたりしないことが大切なことを発見しました。子供たちは自分のベッドを整えるのは自分の責任だということ、だれしも代わりにしてはくれないし、上手にできなくてもしわひとつ直してくれないということを知っています。

私たちが子供全員にこの務めを与えた当初、まず正しい原則を教え、どんなふうにするかを実際にして見せ、ひとりでできる自信がつくまで手伝ってあげました。言いつけを与えるときと同じように、管理の職も子供の能力以上のものを与えないように気をつけています。

第6に、御父は私たちと**親しい交わり**を保っておられます。親切な愛情深い方法で私たちをみもとに近づけておられますが、私たち親もそれを見習うことができます。その方法としては、(1) 子供と一緒に少しずつ行なう、(2) 一緒にひざまずいて祈る、(3) 心と心で接し、子供の立場に立って考える、(4) 励ます、(5) 審判するのではなく理解をもって話を聞くことです。

子供を立派に育てて主のみまえに帰すためにどうしても知らなければならないことは、どんなことをどのようにして教えるかということです。このとりわけ神聖な責任について、御父は完全な手本と教科書を、つまり御父が子供たちにどう接したもうたかを説明するすばらしい聖典を与えて下さいました。

神殿は私たちに信仰を与えてくれます。神殿のおかげで、私たちはこの地上の生活を、創造と救いの計画と究極の将来を観点とした正しい見方で見ることができます。世の価値観や世の哲学は、私たちが主に訓練されて主に似た者となることを認識したときに、影が薄れていきます。本当に万事は主のみ手の中にあって、人生には罪以外に何の悲劇もありません。

日常の家庭生活に目を向ければ、その見方が平安と幸福の大きな基礎となっています。苦難や経済的な危機や死を通じてさえ、御父の従っておられる真の原則と律法への従順が終極の喜びをもたらすことを知ることができるのです。

私たちは御父に似た者になりたいと思い、主の宮居に行ってそのたびに何か新しいものを得、神聖なために書き記すことのできないたくさんのことを学んでいます。また、すべてのことについて主の模範に従いたいと思い、自分たちの家庭をもうひとつの神の家とするように、ふさわしい雰囲気と環境と精神を培おうと頑張っているのです。

（ロジャー・メリル兄弟は教会の人事副部長で、アロン神権委員会で働き、妻のリベッカ姉妹はユタ州テイラーズビル西ステーキ部テイラーズビル第17ワード部の扶助協会コーラス指揮者である。）

占星術、易、降霊術、魔術、魔法について聖典はどのように告げているか

ロバート・J・マシューズ

近年西側諸国では、オカルトや霊験を追い求める宗教に関心を向ける人々が急増している。これは古代の族長やイスラエルの予言者たちのもつ霊的な能力とは全く無縁のもので、魔術や魔法に属するものである。真の予言者はこれに敢然と対抗している。例えば、主はモーセを通してこのように告げておられる。

「あなたがたは口寄せ、または占い師のもとにおもむいてはならない。彼らに問うて汚されてはならない。わたしはあなたがたの神、主である。」（レビ19：31）

また主は次のようにも告げておられる。

「あなたの神、主が賜わる地にはいったならば、その国国の民の憎むべき事を習いおこなってはならない。

あなたがたのうちに、自分のむすこ、娘を火に焼いてささげる者があってはならない。また占いをする者、卜者、易者、魔法使、

呪文を唱える者、口寄せ、かんなぎ、死人に問うことをする者があってはならない。

主はすべてこれらの事をする者を憎まれるからである。そしてこれらの憎むべき事のゆえにあなたの神、主は彼らをあなたの前から追い払われるのである。

あなたの神、主の前にあなたは全き者でなければならない。

あなたが追い払うかの国々の民は卜者、占いをする者に聞き従うからである。しかし、あなたには、あなたの神、主はそうする事を許されない。」（申命18：9－14）

占星術や降霊術などに対する信仰では、予言者や族長たちが説いた真の宗教を打ち建てることはできなかった。そのことは、前述の聖句からもよくわかる。このような信仰は、主から離れた周囲の国々に見られる偽りの宗教の根底をなすものである。

しかしながら、モーセがイスラエルに心底告げたかった教えは、次の聖句に注目することによってのみ理解できることである。

「あなたの神、主はあなたのうちから、あなたの同胞のうちから、わたしのようなひとりの預言者をあなたのために起されるであろう。」（申命18：15）

以上の聖句が説く意味は次の通りである。すなわち、天父なる神は御自分が召したしもべである予言者を通してその民に語られる。従ってイスラエルは占いをする者や星占い師のもとへ行って霊の導きを求めようとしてはならない。そしてモーセはこの神の予言者のひとりである。

またこの聖句は、キリストのことをも直接に示している。そしてこのキリストこそ、すべての予言者が証した御方であり、真の予言者の究極の模範者である。私たちはイエスのことを述べるために、第15節の聖句を他の節と切り離して引用することがよくある。しかしそうしたときには、偽りの予言者と真の予言者を対照した意味が失われてしまう。実に異教の説く教えには、神の任じられた予言者、聖見者、啓示を受ける者が授かっている真の賜を装ったものが見受けられるのである。

これについて、イザヤは次のように述べている。

「人々があなたがたにむかって『さえずるように、ささやくように語る巫子および魔術者に求めよ』という時、民は自分たちの神に求むべきではないか。生ける者のために死んだ者に求めるであろうか。

ただ教とあかしとに求めよ。まことに彼らはこの言葉によって語るが、そこには夜明けがない。」（イザヤ８：19,20）

真の予言者が星占い師や魔術師に勝っていることは、ダニエルがカルデヤ人の間で経験した出来事の中にうかがえる。

「そこで王は命じて王のためにその夢を解かせようと、博士、法術士、魔術士、カルデヤびとを召させたので、彼らはきて王の前に立った。

王は彼らに向かって、『わたしは夢を見たが、その夢を知ろうと心に思い悩んでいる……

わたしの言うことは必ず行う』（と言った）

カルデヤびとらは王の前に答えて言った、『世の中には王のその要求に応じうる者はひとりもありません。どんな大いなる力ある王でも、このような事を、博士、法術士、カルデヤびとに尋ねた者はありませんでした。

王の尋ねられる事はむずかしい事であって、肉なる者と共におられない神々を除いては、王の前にこれを示しうる者はないでしょう。』……

ついに夜の幻のうちにこの秘密がダニエルに示されたので、ダニエルは天の神をほめたたえた。

ダニエルは言った、『神のみ名は永遠より永遠に至るまでほむべきかな、知恵と権能とは神のものである。……

わが先祖たちの神よ、あなたはわたしに知恵と力とを賜い、今われわれがあなたに請い求めたところのものをわたしに示し、王の求めたことをわれわれに示されたので、わたしはあなたに感謝し、あなたをさんびします。』

ダニエルは王に答えて言った、『王が求められる秘密は知者、法術士、博士、占い師など、これを王に示すことはできません。しかし秘密をあらわすひとりの神が天におられます。彼は後の日に起るべき事を、ネブカデネザル王に知らされたのです。』」（ダニエル２：２－28参照）

同じように、モーセとアロンも、エジプトの魔術師に勝る力を持っていた。（出エジプト７：10－12参照）

北方のイスラエル王国は真の予言者の警告に耳を貸さず隣国の偽りの宗教にならい始めた。特にイスラエルの王ア

ハブの妻であった、フェニキア人の邪悪な王女イゼベルがその邪教をイスラエル王国に導入したのであった。また、占いやまじないがこれら偽りの宗教の一部をなしていたことは、列王下17：16－18の記述より明らかである。

「彼らはその神、主のすべての戒めを捨て、自分のために二つの子牛の像を鋳て造り、またアシラ像を造り、天の万象を拝み、かつバアルに伝え、またそのむすこ、娘を火に焼いてささげ物とし、占いおよびまじないをなし、主の目の前に悪をおこなうことに身をゆだねて、主を怒らせた。

それゆえ、主は大いにイスラエルを怒り、彼らをみ前から除かれたので、ユダの部族のほか残ったものはなかった。」

この結果、間もなくイスラエルは、強力なアッスリヤの軍隊に征服され、打ち倒されてしまった。

それから一世紀ほど経った頃、南方のユダ王国の善王ヨシヤは待望の改革を行なった。

彼は偶像に仕える「祭司たちを廃し、またバアルと日と月と星宿と天の万象とに香をたく者どもをも廃した。……

ヨシヤはまた祭司ヒルキヤが主の宮で見つけた書物にしるされている律法の言葉を確実に行うために、口寄せと占い師と、テラピムと偶像およびユダの地とエルサレムに見られるもろもろの憎むべき者を取り除いた。」（列王下23：5，24）

新約の時代、パウロがクプロ（キプロス）島で伝道の業に携わっていた頃、エルマという名の魔術師である偽りの予言者がいた。彼はパウロの教えに従わなかったばかりでなく、その島の「総督を信仰からそらそうと」さえした。そこでパウロは「聖霊に満たされ、彼をにらみつけて言った、『ああ、あらゆる偽りと邪悪とでかたまっている悪魔の子よ、すべて正しいものの敵よ。主のまっすぐな道を曲げることを止めないのか。」（使徒13：6－10参照）

パウロがこの魔術師について感じた過程には、何らの誤りも介在する余地がないのである。

後にパウロがエペソでイエス・キリストの福音を宣べ伝えた折、大勢の人々が福音に改宗し、彼らは「きて、自分の行為を打ちあけて告白した。それから、魔術を行っていた多くの者が、魔術の本を持ち出してきては、みんなの前で焼き捨てた。その値段を総計したところ、銀五万にも上ることがわかった。

このようにして、主の言はますます盛んにひろまり、また力を増し加えていった。」（使徒19：18－20）

主の真の羊の群れに入ったこれらの者たちは、「魔術」の書をもはや欲しなかったし、必要ともしなかった。これらの書物は明らかに偽りの宗教の手引き書だったからである。

予言者サムエルはサウロ王にこう勧告している。「そむくことは占いの罪に等しく、強情は偶像礼拝の罪に等しい」（サムエル上15：23）　このように、邪教の礼拝であると知りながらそのような礼拝を行なうことは罪深い行為である。また聖書の記録では、サウロは主のみたまを失い、それと同時に降霊術に身を委ねるようになったと記されている。

パウロがガラテヤ人に宛てて書いているように、「まじない」は「肉の働き」のひとつであり、主のみたまをもつ人々が嫌うものである。（ガラテヤ5：19－21参照）

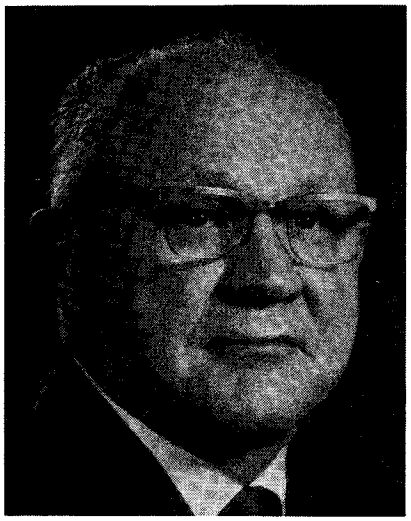
聖典の告げるところによれば、魔術師や巫子（みこ）、降霊術師の行なう魔法やまじないは、世の偽りの宗教や邪教に特有のものであり、このようなものを行なう者たちは、正に真の予言者と使徒に挑んでいるのである。従って、イエス・キリストのみたまと信仰についてよく理解している者は、いかなるかたちであれ、まじないや降霊術の類には関係することを欲しないであろう。

（マシューズ博士は現在ブリガム・ヤング大学古代聖典学部の助教授であり、また教会成人コーリレーション委員会の一員でもある。）

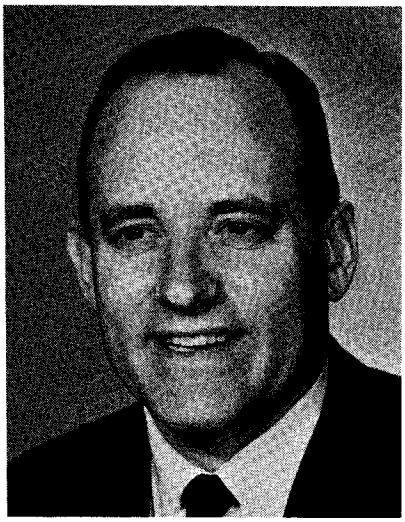
イスラエルは占いをする者や星占い師のもとへ行って霊の導きを求めようとしてはならない。これらは世の偽りの宗教や邪教に特有のものであり、このようなものを行なう者たちは、正に真の予言者と使徒に挑んでいるのである。

地の果てまで

新設された国際伝道部について



ブロックバンク長老



ハンター長老

1973年初頭、大管長会より辺地に居住する教会員のために国際伝道部を設立することが発表され、十二使徒評議員会補助であるバーナード・P・ブロックバンク長老が伝道部長に召された。

国際伝道部の本部はソルトレーク・シティーの教会本部旧館に置かれているが、他の伝道部とは異なり、福音を宣べ伝える宣教師がひとりもいない。

以下は、伝道部の現況についての質問に、伝道部のアドバイザーである十二使徒評議員会会員ハワード・W・ハンター長老とブロックバンク部長が回答したものである。

質問：国際伝道部の意図するところについて話していただけませんか。

ハンター長老：ステーキ部や伝道部の組織されていない地方に住むすべての教会員のために組織されたものです。この伝道部が設けられたことによって、彼ら自身が責任を持つ教会のユニットが置かれ、必要が満たせるようになるのです。

質問：その人々にはこれまでどこが働きかけましたか。

ハンター長老：あえてあげるとしたら、地方の教会ユニットですね。

質問：国際伝道部はこれまでの伝道部とは異なるものですか。

ブロックバンク長老：ええ、異なります。完全に組織された伝道部には福音を宣べ伝える宣教師がいます。しかし国際伝道部には、そのような宣教師はいませんし、伝道の責任もありません。

質問：所属会員は何名ですか。

ブロックバンク長老：会員数は常時変動していますが、現在約500名です。恐らくもう500名くらいはいると思いますが、彼らの情報は手元にありません。

質問：その500名の人々はどこにいるのですか。どこか彼らが、大勢集まっている地域がありますか。

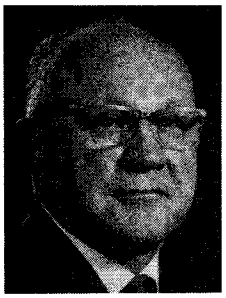
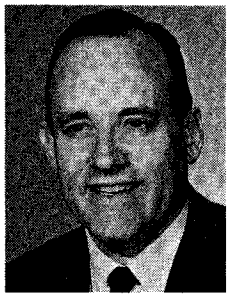
ハンター長老：最も大きいのはアイスランドのグループです。しかしその人数も、どこか一国の聖徒を合計した数よりは少ないのです。またとても広い範囲に住んでいるために、ひとつの地点を取りたてて言うこともできません。小さな島では、太平洋のイースター島があります。ここには教会員がひとりしかいません。また、マダガスカル島にも、そして南アメリカとアフリカの間にある大西洋上の小島、アセンション島にも、住んでいる教会員はひとりだけです。

質問：国際伝道部の会員はほとんどアメリカ人ですか。

ブロックバンク長老：ほとんどそうです。けれども、イギリスやフランス、ドイツ、カナダ、その他数多くの国の人々もこの伝道部にいます。ある人は兵役で、またある人は外交官の仕事をしています。そのほか、事業家もいます。キューバで働いているイギリス人の会員がいますが、キューバは私たちの責任下にありません。けれどもほかに担当する人がいないので、私たちが彼と連絡を保っています。

質問：国際伝道部の会員には、実際にどのような方法で働きかけているのですか。定期的に個人的な接触を図っているのですか。

ブロックバンク長老：すべて手紙と教会のプログラムと出版物で行なっています。彼らの利用できるものは何でも通知します。基本的には、すべてのプログラムが利用できるような体勢をとっており、印刷物や資料等も入手できる

ようにしています。例えば、連絡のついている会員に対しては、家庭の夕べのテキストが手に入るようにしていますし、各会員には少なくとも2、3ヵ月に一度、またグループリーダーや支部長には少なくとも月に一度、手紙を出すようにしています。

ハンター長老：他と交流のない家族の場合は、姉妹に扶助協会のテキストを支給し、彼女が扶助協会の活動とつながりを保てるようにすることができます。初等協会についても同様です。執事に聖任される年齢の子供がいれば、彼をその聖任に備えさせるのに必要な情報を両親に送り、次いで、彼を聖任する準備にかかります。また子供が8歳に近くなったら、家族とその子供のバプテスマについて打ち合わせます。

質問：地方における管理はグループリーダーと支部長を通じて行なうのですか。

ハンター長老：その通りです。伝道部長が彼らを任命します。会員が国際伝道部の管轄地域内に移動した場合、彼らの教会の記録は国際伝道部へ移管されます。その手続きは、通常のワード部間の移動の際と同じです。

質問：監督と支部長は、移転会員を国際伝道部に照合する上で、とても大切な役割を果たすわけですね。

ハンター長老：そうです。移転会員のために私たちが行なうことを十分理解していただけたら、監督と支部長は私たちに必ず情報を提供してくださると思います。

質問：では、どのような方法で連絡すればよいのですか。会員が伝道部のない地域へ転居することになったら、その人が直接に手紙を書くのですか。

ブロックバンク長老：最も良い方法は、国際伝道部に直接手紙を書いて、自分の名前と住所を通知し、同時に、会員記録の所在ユニットと、自分自身に関連した情報をも一緒に知らせてくださることです。そうしたら、私たちの方からすぐに会員記録の移管手続きをとり、会員には提示と通知とをお送りします。

ハンター長老：ステーキ部や伝道部のない地方に行くことが決まったとき、すぐにブロックバンク部長に連絡くだされば、部長から、その地方に移転したときに交流することのできる他の教会員と、その他活用できる事柄についての情報が送られます。ブロックバンク長老と連絡をとるのが早ければ、それだけ多くの恩恵にあずかることができます。

質問：同じ地域内にいる他の家族のことを知らせるということですが、それは頻繁に行なっているのですか。

ブロックバンク長老：毎日のように会員からの問い合わせがあります。外国での仕事に出かける人や、すでに赴任している人などからです。その内容は、その地域に住んでいる会員がいるかどうか知りたいというものです。たとえ300キロあるいは400キロ離れていたとしても、文通することができますし、身近にだれかがいると思うと安心感も出てきます。これを行なっている事例は数多くあります。

ハンター長老：実際、ある方から手紙をいただきました。それによるとこの人は、外国に派遣されることになったのですが、任地は幾つかの中から選択を任されていました。そこで彼はブロックバンク長老に、これらの任地に教会員がいるかどうか、問い合わせてきたしだいです。任地をどこに選ぶかは、彼にとって大切だったわけです。

ブロックバンク長老：辺地に住んでいる会員をだれか知っている人があれば、国際伝道部に通知していただきたいと思います。できれば、住所も通知ください。それによって私たちはその人と連絡をとるようにします。国際伝道部では、現在その会員が住んでいる場所と合わせて、以前の居住地についての情報も必要としています。そうすれば、その会員記録を容易に見つけることができるからです。

ハンター長老：そのような例がしばしばあります。両親や子供の名前がわかれば、もっと好都合です。個人の名前だけでは、その家族がいるかどうかわからないからです。ですから、家族の名前がわかればとても助けになります。

質問：会員たちは、伝道部を通してどのように大きな恩恵を受けているのでしょうか。教会に近くあるということは、彼らにとって助けとなっていますか。

ブロックバンク長老：会員からの手紙によると、教会が関心を寄せ、気づかい、いつも連絡を保っていることをとても喜んでいるようです。この結果、彼らも教会と接触を保つようになっています。

質問：聖典を学ぶための定例プログラムを設けるように奨励していますか。主と教会に近くあるためには、どんなことが行なえますか。

ブロックバンク長老：辺地に住み、それまで慣れ親しんできた家庭環境や教会プログラムから長い間離れることになった人にとって、手紙は心に大きな効果と影響とを及ぼ

すことでしょう。ですから私たちは、彼らが大切であり、教会も彼らがそのプログラムを十分に活用してほしいと望んでいることを、彼らに愛と親しみをもって知らせることにしています。私たちはスペンサー・W・キンボール大管長の挨拶を送り、大会のときには予言者のメッセージを送ります。大管長会のすべての話を集めて送り、それを読んで神の子としての生活をするように奨励しています。教会員がこの世において大きな誘惑の下に生活していることを心に留めるならば、あなたは手紙で多くのことを行なえます。彼らは皆、孤独な気持に駆られることがよくあります。ですから教会とのこの接触は、彼らの信仰と証を築くものであり、また彼らが教会と一筋の糸で結ばれていることを知らせる上で役立つことでしょう。

質問：私たちは今ワード部や支部で恵まれた状態にいるわけですが、アイスランドやマダガスカルに住む人々のために何かできることがありますか。

ブロックバンク長老：遠く離れた地で暮らしている家族や友人がいたら、いつも文通するように努める必要があります。

ハンター長老：奉仕の機会を求めているヤングアダルトやスペシャルインタレストのグループは、アイスランドやマダガスカル、あるいはその他の地に住む教会員を家族の一員と考えて励ましを与えることができます。また、国際伝道部を通じて家族と交流することもできます。

質問：この仕事には特別な喜びがあると思いますが……

ハンター長老：大管長会と十二使徒評議員会によって、国際伝道部を設立することが決定され、ブロックバンク長老が伝道部長に任命されることになったとき、私はその将来性にとても明るいものを感じました。

このプログラムは、ほかではその機会を得られない大勢の人々の生活にとって、必ずやよきおとずれとなることでしょう。また教会を捜している人々のお役にも立つと思います。このプログラムは多くの人々の生活に大きな幸福をもたらすに違いありません。そしてその実現の可能性は、達成したいと思う事柄に対してビジョンを持つときに、大きくふくらむのです。

ブロックバンク長老：今日教会は、すべての会員に非常に深い関心を寄せています。そして多くのプログラムは、教会員一人一人に手を伸べるために用いられています。

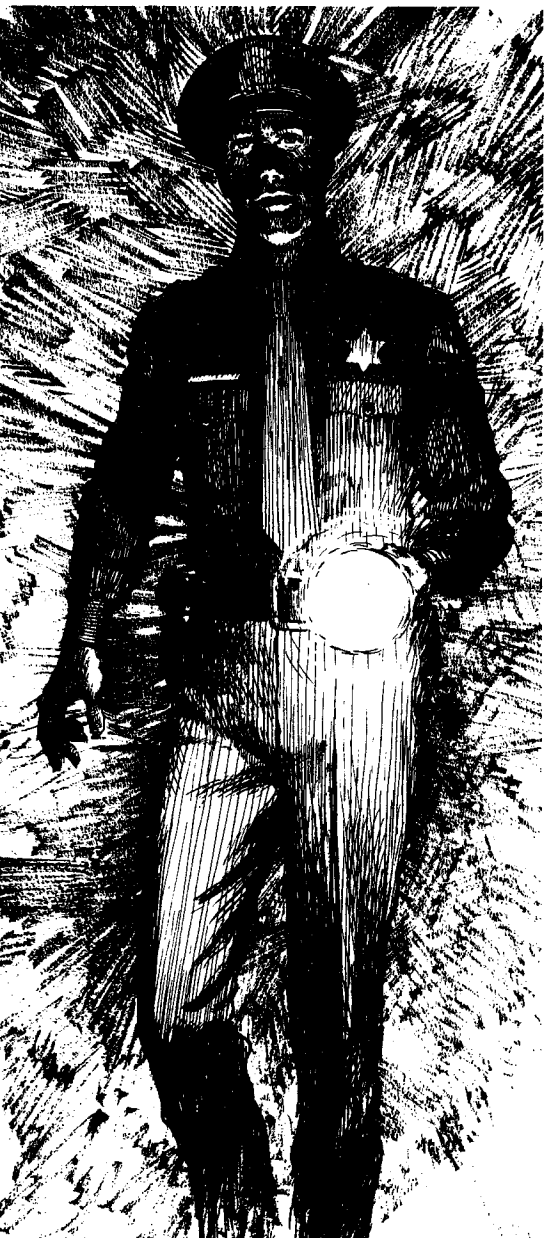
教会の組織から遠く離れ、辺地に住んでいる教会員を見つけ、彼らに手を差し伸べる役割を負っているのが国際伝道部なのです。主はすべての聖徒が教会に近くあるように望んでいらっしゃいます。迷える羊についての主のたとえ話がありますが、その話の中で、1匹の羊が群れから迷い出てしまいます。そして主のもとにいるのは99匹の羊だけです。そこでその1匹を捜すために出かけて行くという話です。

私たちが責任を負っている人々は教会から迷い出ているわけではありませんが、教会の伝道部やステーキ部の組織からは遠く離れています。従って、彼らが教会のもたらす祝福と、主の生命の道に伴う祝福とにあずかれるように、彼らに手を差し伸べ、近くあるようにしてあげるのは私たちの責任です。教会が彼らに対して関心をもっており、主も気にかけておられること、そして彼ら自身、主が備えておられるものを利用する必要のあることを知っていただきたいと思います。またこの方法を用いることにより、辺地にいる人々は主の予言者や使徒を身近に感じ、主の教えられた人生の道や教会のプログラムから離れずに生活することができるのです。

教会幹部の話

◇◇息子へ◇◇

七十人最高評議員会会員
S・デルワース・ヤング



私は若い人たちの顔を見つめるとき、どうしてもあふれる涙を禁じ得ない。

実は、私にも息子がひとりいた。彼は、1年の大学生活のあと、戦地に赴いた。私は、あの子がりりしく出陣したと思いたい。

彼が担当の下士官から審問を受けていたときのこと、下士官は「いくつかの訓練科がある」と言って「無線、料理、外国語、情報、衛生……」と合計8つほどの科をあげた。青年たちは、希望により軍に入る前にその中のどれかひとつを選んでよいと説明を受けた。下士官は「訓練科からひとつを選ぶか、戦闘を選ぶかは自由だ」と言った。そのとき私の息子と、もうひとりの青年が、即座に「戦闘に出ます」と答えた。

あとで私が息子に、「なぜ戦いを志願したのだ」と聞くと、息子は「だれかが戦わなくちゃならないんだもの」と言った。彼は、自分がわかっていながらそれを避けて、そのためにほかのだれかが死の危険を冒すのは気持が許さないと言った。「だれかがこの戦争で死ななければならないのなら、自分だけ危険を免れても、苦しいだろうと思うんだ」と。

私にしてみれば息子はまだ二十歳で、ちょうど君たちの年頃だ。自分の息子に語るような気持で君たちに話すことを、君たちも許してくれるだろう。君たちへの忠告は息子への忠告なのだ。

私は息子に、**嘘をつくな**と言いたい。たったひとつの嘘でもつくと、その嘘をかばうためにその場の様子をことこまかに全部記憶しなければならないはめになる。それに、一度嘘をついてそれがばれると、たった1回でも、そのおかげで、一生相手は君を信頼してくれなくなるだろう。もし彼が信頼も含めて君に何かの便宜や役職を与える立場の人なら、君の名前があがるたびにその嘘を思い出して、君を信用できないに違いない。君はとっくの昔に悔い改めて赦されているかもしれない。相手も許してくれているだろう。しかしやっぱり心の底では、君が本当に悔い改めたかどうか、確信が持てないのではないだろうか。そうではなくて、君がどんなことでもいつも本当のことを話していたら、いつしか君の評判は確立し、君の名誉にもなるだろう。

そのことについて、私には経験がある。妻が重病にかかったときのこと、私はユタ州プロボのボーイスカウト大会に出ることになって、いつのことだったか忘れてしまったが、その晩6時までには帰宅すると妻に約束した。妻はベッドから起きられなかったので、ベッドのわきに食べ物を置いて、寝たきりの妻をひとり残して出かけなければならなかった。

ところがプロボで事件が起きて、私は夜の11時まで車の中に足止めされてしまい、心配しながら家に向かった。当時の道路は今とだいぶ違い、幾つもの町を越えなければだめで、ちょうど真夜中の12時頃にソルトレークを通過した。ハイウェイを北に向かっていると、満月はこうこうと輝いて真昼のように何でも見えた。走っているのは私の車だけだった。ぐんぐんスピードを

上げ、やがてハイウェイの合流点を曲がり、家に向かって登りの山道にさしかかった。その道を曲がってからさらに速度を上げて時速110キロになったが、当時のその道路では違反ではなかった。車はスピードを上げてヒル・フィールド方向の道に折れ、それからウィーバー・キャニオンへ下った。すると丘を半分ほど下った所で、バックミラーに赤いライトが映った。パトロールの警官がヒル・フィールドの道に待機していたのだ。私は車を止めて外に出た。（警官が来たら車を降りて、両手を上げて武器を持っていないことを知らせるものだ。とにかくそんな夜ふけには。）もう1時にもなろうという時刻だった。

私は2、3メートルあと戻りして、そこに立っていた。警官はヘッドライトで私を照らし、30メートルほど離れた所にパトカーを止め、車から降りて私のそばに来た。「運転免許証と、車の登録証を見せて下さい」と言うので登録証を取り出すと、彼はそれを見たきりで、免許証の方は見ようとしなかった。

私が「スピード違反ですか」と聞くと、彼は「そうです。時速100キロを越していましたよ」と言った。

私が「110キロ以上出していました」と言い、「違反チケットを下さい。家に帰らなくちゃならないんです。妻がひとりで病気なんです。罰金は必ず払いますから、このまま行かせて下さい」と言うと、彼の返事はこうだった。

「いや、違反チケットはいいですよ。同じことをしないように要注意チケットを差し上げましょう。呼び出しは受けませんが、またスピード違反をしたら今回の違反も勘定に入れられますよ。」

私はどうして要注意チケットだけでよいのか、わけがわからなかった。彼はチケットを書いて私に手渡してから、ニコニコ顔で、警官には珍しく握手の手を差し伸べながら言った。「名前はバイビーといいます。ボーイスカウトのキーゼルキャンプであなたのお世話になりました。」

それから夜道を運転しながら、私は幾度もひとりでつぶやいた。「もしも彼に嘘をついていたら……、もし彼に嘘をついていたら……、もし彼に嘘をついていたら……」と。

嘘をつくとその嘘は一生君についてまわって、いつもいつもそれこそ死ぬまで心に焼きつくものだと、はっきり言うことができる。

息子に忠告したい2番目のことは、**偽りの証言をするな**ということだ。偽りの証言はしやすいもので、しょっちゅう私たちの口にのぼっている。だれがどうした、だれがどうしたと思う、などという噂話を、おおかたの人は好んでいる。「人に関して良いことが言えないなら、何にも言わないことだ」という言葉を、君たちは何べんも耳にしているだろう。

私は裁判の証人に立つときのことを話しているのではない。問題にしているのは、君たちが考えなしに、本当のことであれ嘘のことであれ、また聞きで人に汚名を着せたりレッテルを張ったりして、仲間におもしろ半分話して聞かせることなのだ。それは危険なことだ。

以前に私がソルトレークシティーでステーキ部大会を司会していたときのことである。見るとジョージ・F・リチャーズ十二使徒会会長が出席しておられる。そこでお話を頼むと、「いや、私はけっこうです。どうぞそのまま続けて下さい」ということだった。

そこで私は話し始めた。「噂話というものは大抵の人が真に受けるし、また人を生涯傷つけてしまうものだから、偽りの証言は決してしてはならない」という内容だった。

すると話の中途で肩を叩かれたような気がして、見ると、リチャーズ長老が私のすぐうしろに立っていて「気が変わって話したくなりました」という。

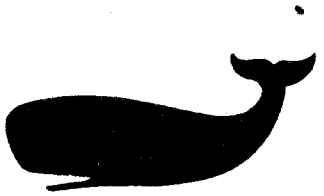
彼はそれからこのような話をした。「私があるステーキ部で高等評議員をしていた頃、ある人が別の人を重大な罪で告発しました。私たちは当人を法廷にかけるかどうかで議論しましたが、結局ステーキ部長が彼と個人的に話すことになって、話合いが行なわれました。その結果、彼はその事件があった当時はこの州におらず、無罪であることが立証され、私たちも全員が納得しました。どこかに出かけていたので事件を起こすはずがなかったのです。

それから40年がたち、その人の名は教会でも重要な役職の候補に上がるようになりました。ところが、昔それが間違いだったのが証明されたというのに、その人についてのあの話は本当に嘘だったのだろうかと、われしらず疑う気持が湧いてくるのです。40年も前に偽りだと立証された嘘の話のせいで、その人に反対の意志表示をしたい気持をぬぐいきるのに苦労しました。」彼はそれだけ言って席に座り、私が話をひきとって先を続けた。

それは君たちにも起こり得ることだ。自分が噂にのぼったとき、それはいったいどんなものかがいやというほどわかるだろう。

主が君たち若者を祝福して下さるように。

ヨナ



ジョン・A・トゥベットネス

ヨナの話の史実性についてはこれまで、数人の学者がいくつかの点で異論を唱えている。第一に彼らは、説明があいまいなことを挙げている。ニネベ、ヨッパ、タルシシという地名が出てくるが、ニネベの王に関する記述はどこにもないというのである。

第二に、旧約聖書にあるニネベの民についての記述は、劇的な悔改めのことだけである。

第三に、ヨナ書はヘブル人の神の遍在と愛を証明するというはっきりした目的をもって書かれており（従って史実に欠けている）、これは専門家たちにヨナの話が完全な作り話であることを信じ込ませる結果となっている。

第四に、人間をまるのみできるほど大きな口をもった鯨もしくは大魚などこの世に存在するはずがない。

彼らが挙げている以上の4つの疑問点のうち最初の3つは、ヨナの話の史実性を否定する要素を含んではいるが、決定的ではない。ある一点をとらえて実話を書こうとする場合には、歴史的な前後関係を考慮に入れなくても、容易に書くことができる。ニネベの民の悔改めの結果、何の変化もなかったならば、ヨナの話の歴史的な価値はない。しかしヨナの話は善悪をさとすだけでも存在する価値があり、主の言葉に従順な者を愛されるとはっきりとうたっている。

ヨナは、ニネベの民に悔改めを説くよう召されたときに非常に憂えた。しかし当時のアッスリア人の残虐ぶりを知れば、それは容易に納得がいくのである。アッスリアの王、アシュアナサーパル二世は、女子供を含め捕虜を非常に虐待したことで世に知られていた。のどが干上がって事切れた者もあり、投獄されたり、生きたまま火あぶりにされた者もあった。さらにくし刺しの刑に処せられた者や、体の表皮をはがされ炎天下にさらされて日干しにされた者もあったことが現在明らかになっている。それというのも有名なニネベ人セナケリブの防壁には、ラキシ占領が描かれており、以上のような方法で、捕虜にしたイスラエル人をアッスリア人が虐待したことをその防壁が物語っているからである。最も軽い虐待を受けた幸運な者でさえ、手、耳、指、鼻などを切り取られ、目をえぐり取られたりしたのであった。

従って、ヨナがアッスリア人を恐れたのは当然のことであった。ヨナが邪悪なニネベの民のもとへ赴こうと決心したのは、海上で猛烈な暴風雨に見舞われ、大魚もしくは鯨にのみこまれるという神のみこころによると思われる経験をした後のことであった。

ヨナに関するイエスの言葉は、ヨナの話に信憑性を添えている。（マタイ12：38－41，16：4，ルカ11：29，30）旧約聖書には「主は大いなる魚を備えて」とあるが、ギリシャ語の新約聖書には「鯨」と表記されているのは興味深いことである。

その魚が「備えられた」ということは、それがただの魚ではなくて、人など優にのみこめるほどの大きな魚であったことがわかる。さらに近代にあって、鯨にのみこまれて生還するという事件が実際に起こった。

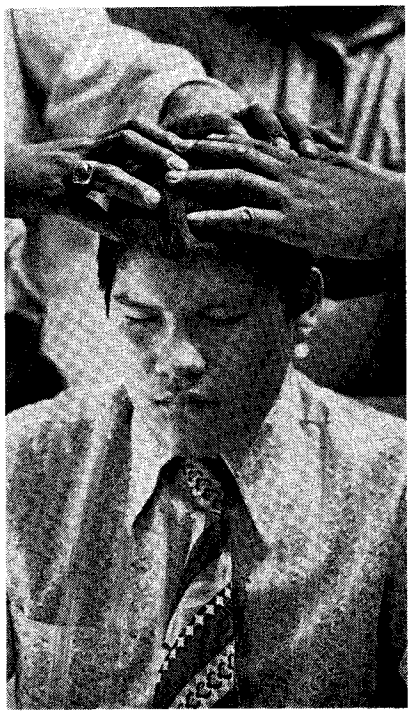
それは1891年のことである。フォークランド島の沖合で捕鯨をしていた一団は、思いがけない災難に見舞われた。体中深くもりを突き刺された手負いの鯨が、小さなボートめがけて襲いかかり、転覆させてしまったのである。海中に放り出された乗組員のうち3人は、ついに母船に戻ることができなかった。

その夜遅く、死んだ鯨が海面に浮かび上がり、捕鯨船の横腹に引き寄せられた。そして乗組員がその鯨を解体し始めたときのことである。何と行方不明になっていた3人のうちのひとり、ジェームズ・バートレイが鯨の胃の中から15時間ぶりに発見されたのである。しかし酸度の非常に強い鯨の胃液はバートレイの肌をすっかり漂白し、髪の毛は抜け落ち、目はほとんど盲目に近い状態となっていた。捕鯨員として働けなくなったバートレイは靴屋に身を転じ、余生を送ったのである。

一見夢物語とも思えるヨナの話も、近代に実際に起こったこの同じ状況下の神秘的な事件と関連づけて考えるならば、実話であるという確信が増すのである。またアミッタイの息子である予言者ヨナの史実性については、ヤラベアム二世の時代の人であることがわかっている。（列王下14：25参照）

（トゥベットネス兄弟は現在、イスラエルのヘブライ大学で人類学博士号取得中である。またエルサレム支部の副支部長として活躍している。）

聖霊の賜（せいれい　たまもの）



断食日曜日の聖さん会で、バプテスマを受けた男の子や女の子、それにおとなの人が、礼拝堂の前のほうによばれるのをよく目にします。メルケゼデク神権をもっているお父さんやほかの人もよばれます。確認（かくにん）の儀式（ぎしき）が行なわれるのです。儀式を受ける人はいすにこしかけ、神権者たちがその人の頭の上に手をおきます。そして「末日聖徒イエス・キリスト教会の会員に確認し、次いで申します。なんじ、聖霊を受けよ。」

聖典には、天のお父さまのところに帰って共に住むためには、だれでもバプテスマを受け、聖霊の賜を受けなければならないと書いてあります。

聖霊は特別な力をもった聖なる御方です。神会の3番目の御方です。

天のお父さまとイエスさまは、わたしたちと同じように骨と肉のからだをもっていらっしゃいますが、聖霊は人の形をしている霊の御方です。人に語りかけることもできますが、とても小さな声なので、よく耳をすまさないと聞こえません。

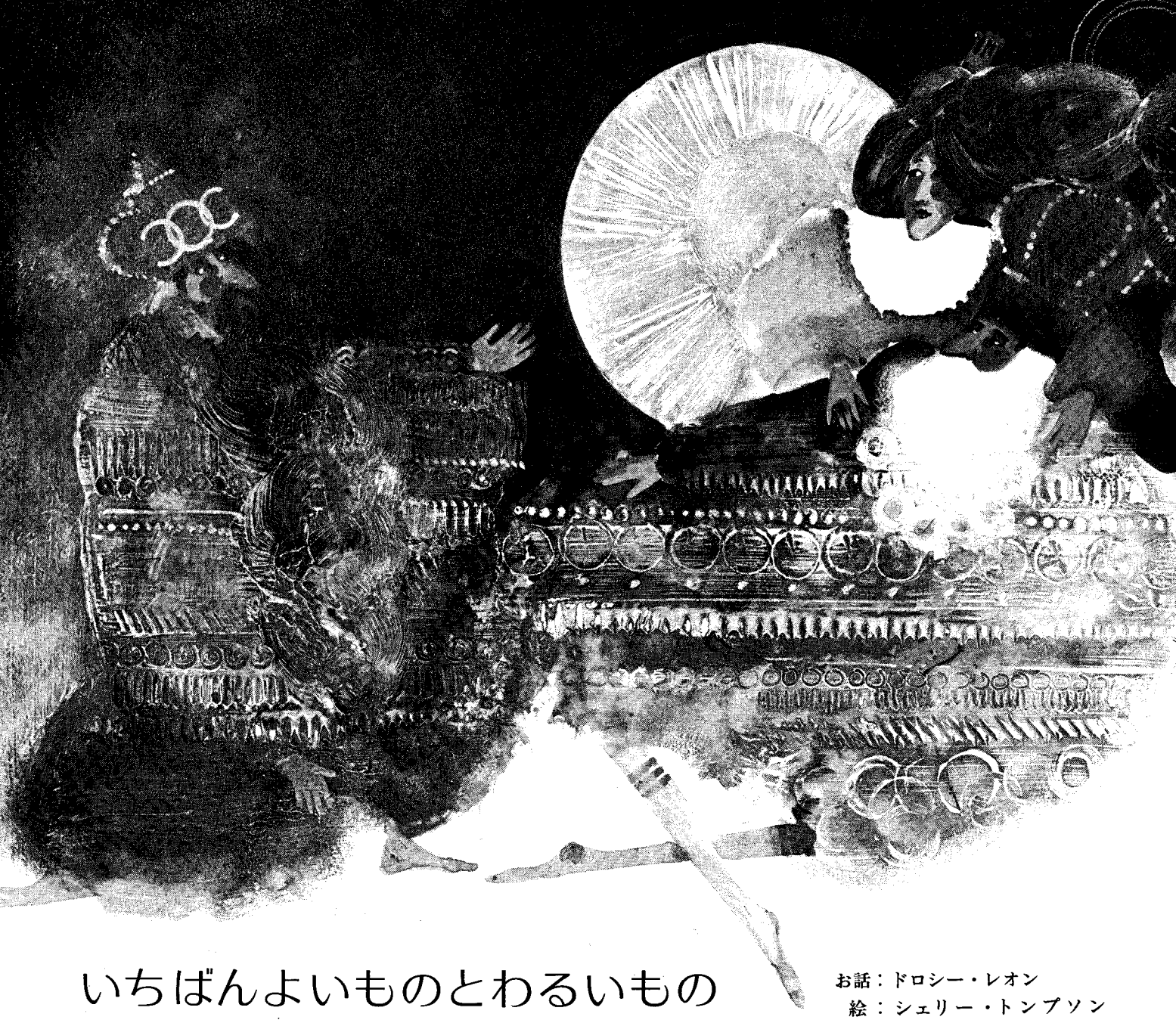
聖霊はわたしたちに、何が正しくて何が悪いかを教えてくれます。証を強めるのを助けてくれます。そして危険にあわないよう導いてくださったり、たいせつなことを思い出させてくださったり、困ったときには助けてくださったりします。でもこのような祝福を受けるためには、天のお父さまの戒めをよく守り、聖霊の静かな声に耳を傾けなければなりません。

聖霊はわたしたちが人々に福音を伝えるとき、助けて下さいます。でも助けを求めなければだめです。また福音が真実なものかどうかを、心から求めている人に、証をすることもします。

メルケゼデク神権の力によって「……なんじ聖霊を受けよ」と言われたとき、あなたは聖霊の賜を受けます。そしていつも聖霊に助けをお願いすることができるのです。日曜学校やプライマリーで歌うこの歌の意味をもう一度よく考えてみましょう。

みたまは小さな声で導く
悪いことはやめるように
正しい道へと守り導く
耳をすまし
よく聞いてごらん
小さなささやきの声を
みたまの声を

（子供の歌B－93）



いちばんよいものとわるいもの

お話：ドロシー・レオン
絵：シェリー・トンプソン

あるところにたたかいがあって、アバドシア王という王さまの軍がかちました。そしてたくさんのてきのへいたいをつかまえました。

「おお、なんとたくましいものどもであろう。」　つかまえたへいたいをみて王さまが言いました。

「まことに、そのとおりでございます。」　おきさきはそう言って、王さまをほめました。

「はて、どうしたものであろう。わしらはあのものどもの中から、けらいをひとりえらばなくてはならぬ。しかし、どやつも力がつよく、りこうそうにみえるではないか。」

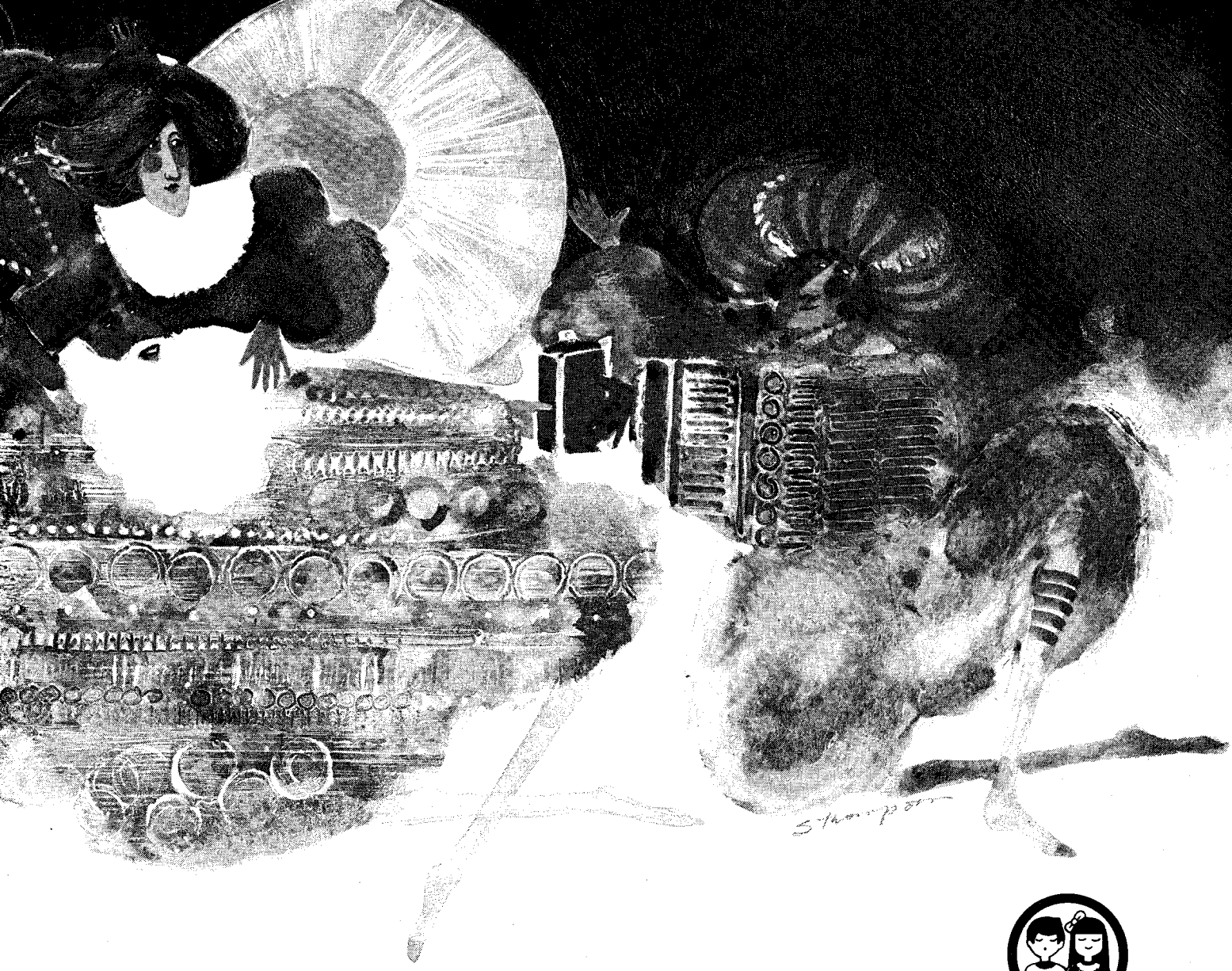
そこで王さまは、ごじぶんのちえぶくろとなっている人をよんで、こうたずねました。

「あのものどもの中からひとりけらいをえらびたい。一番よいものをえらぶにはどうすればよかろうか。」

「それは、むずかしいことでございます。でもごあんしんくださいませ。わたくしによい考えがございます。あのものたちをよくごらんになってくださいまし。そして、かけ足をすればチーターのように早く、目はタカのようにするどく、声は小羊のようにやさしい者をおさがしください。そのものがりこうかどうかをためすには、市場にかいものにやってくださいまし。そして、何かよいものをかってくるよう言いつけるのでございます。つぎに、何かわるいものをかってくるようにお言いつけください。」

王さまは、言われたことをよく考えてみました。そしてそのとおりにしてみました。

ところで、王さまがつかまえた人の中からけらいをさがしている、というわさがつかまったへいたいのあいだにもひろがりました。だれもが、じぶんがえらばれたいと思いました。ですからみんなじぶんをよくみせようとしました。そして言われたしごとは何でもしました。



こうして王さまは、しばらくとらえた人たちをかんさつしました。はたらいているところ、走ったりしているところ、食べているところ、と王さまはじっくりみていました。ある日のことです。王さまは、ピラミッドのようにどっしりとしたひとりの男の人に目をとめました。その人は足が早く、きびきびとしていました。目はしっかりととおくを見ています。その声といったら、春のそよ風のようにやさしいのです。

王さまは、その若者をごじぶんのところにおよびになり、お金をわたして言いました。「村の市場へ行って、なにかよいものをかってくるがよい。」

まもなくしてその若者は、ひときれのタン[1]をもってかえってきました。

「ではこんどはなにかわるいものをかってくるがよい」と王さまがめいれいしました。ところがその若者は、こんどもタンをかってかえってきたのです。

「これはどうしたことじゃ」　王さまはおこってたずねました。「わしがお前によいものをかってくるよう言いつけたときに、お前はタンをかってきた。ところがどうじゃ、わるいものをかってくるように言いつけたのに、またタンをかってきたのではないか。」

「王さま、そのとおりでございます。」　若者はこたえました。「人は舌でよいことをかたり、またわるいことをかたるものでございます。よいことや正しいことをかたる舌ほどすばらしいものはありません。けれどもわるいことをかたるときには、舌ほどわるいものはございません。

この話を聞いて、王さまとおきさきさまは、たいそうよろこびました。そして、その日からこの若者は、王さまとおきさきさまにつかえて、しあわせにくらしたということです。

1．牛や羊の舌をしおづけやくんせいにしたもの

マークのために、

お話：キャロライン・グルークナー

マークは土曜日が来るのがまちどおしくてたまりませんでした。土曜日の夜10時になると、海の水が1年で浜辺から一番遠くまで引くことになっているからです。そうしたら今まで海の底だったところが表われて、ジュノニア[1]という貝を見つけることができるかもしれないのです。マークは貝を集めるのが好きで、とくにジュノニアがほしくてほしくてたまりませんでした。

マークの家ぞくは、やっと春になりかけたころ、海辺の近くの新しい家にひっこしてきました。そのときからマークは貝を集めはじめたのです。いろいろな大きさや形のきれいな貝をいっぱいもっていましたが、ジュノニアだけはどうしても見つけることができませんでした。白地に茶色のしかくいはん点のあるつやつやしたジュノニアという貝を、マークは本でしか見たことがありませんでした。

まちにまった土曜日の朝のことです。マークの家の前に車が1台止まりました。中からジェンおばさんが出てきました。おばさんは、はんたいがわのドアのところに行って、息子のハーブが車からおりるのを手伝っています。ふたりが来たおかげで、マークは貝ひろいに行けなくなりそうでした。

度の強いレンズのおくのハーブの目は、野球のボールぐらい大きい、とマークは思いました。でもジェンおばさんがハーブの手を引いて歩いているのをみると、急にかわいそうになりました。

門をくぐってやってきたハーブは、マークに「やあ」と声をかけました。

「やあ」とマークはできるだけ楽しそうな声で答えました。ところがハーブが貝がらのはこを持っているのを見て、マークは少しすまない気がしてきました。その貝がらのはこは、この前のハーブが来た時に、マークはハーブがじゃまだったので、ハーブの心をその貝がらのはこに向けようとしてハーブにあげたものだったからです。そこでマークは、「おいでよ、君がこの前家に来てから今までに見つけた貝をいっしょに見ようよ」とハーブをさそいました。

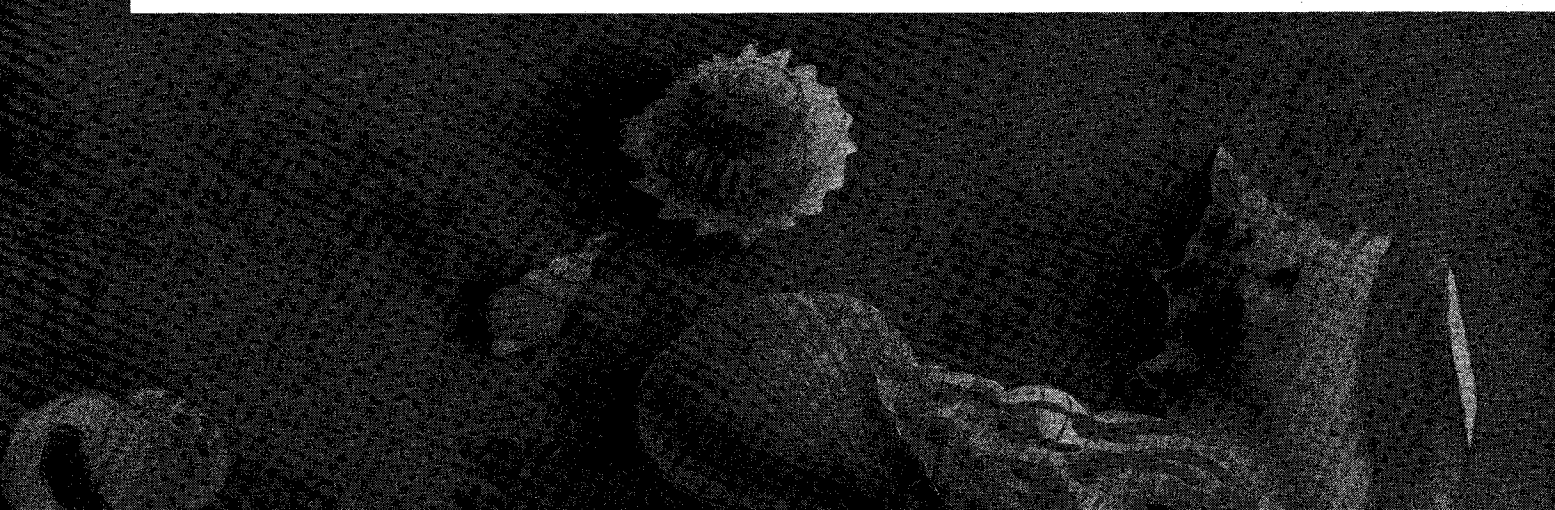
ハーブは、マークの後についてへやの中に入って行きました。マークはハーブの手に二つの新しく見つけた貝をわたしました。

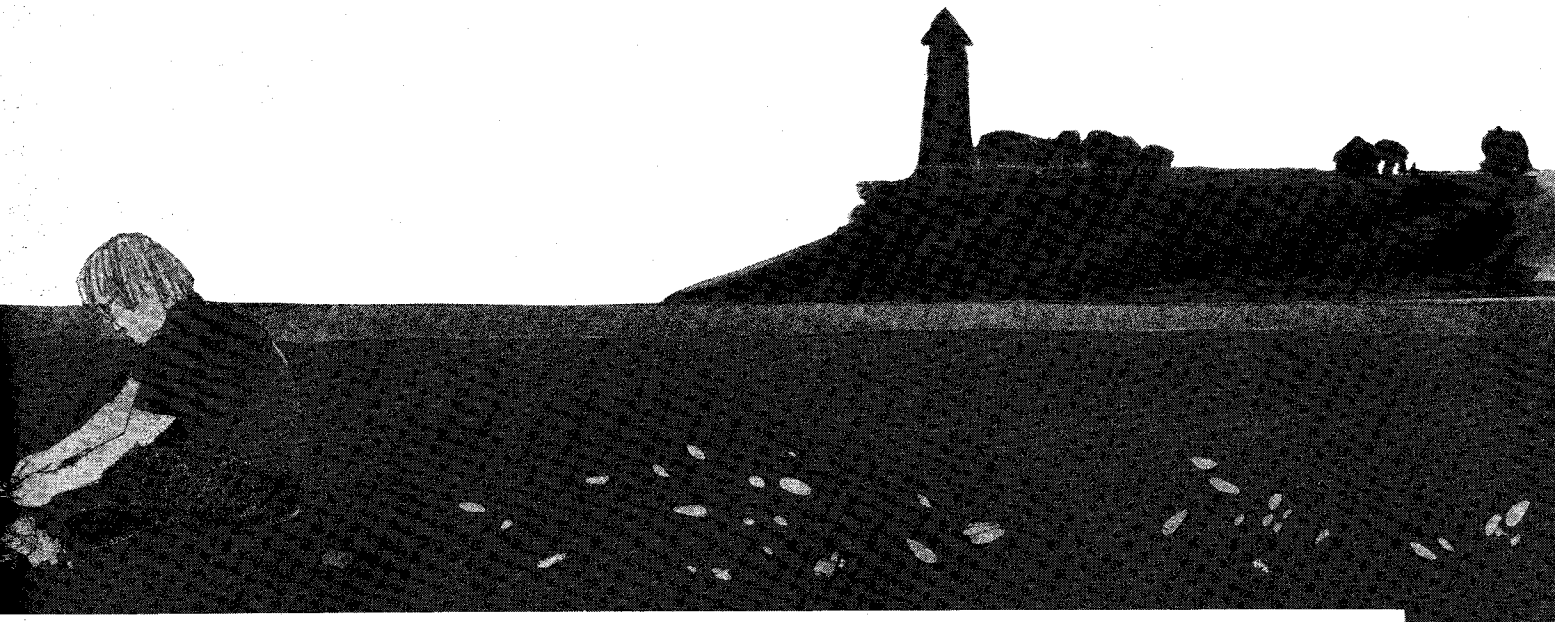
「すごい、チューリップ貝にクジャクアワビじゃない。そうでしょう？」　ハーブは指ですばやく貝をさわりながら言いました。

「そうだよ。でも虫めがねも使わないで、どうしてわかったんだい。」　きょとんとしながら、マークが聞きました。

「手でさわった感じだよ。図書館の本で、君がくれた貝をいろいろ調べていたからね。」

「ハーブ、君はずいぶんいっしょうけんめいに勉強したんだね。君が貝に興味があるなんてちっとも知らなかった





よ。」

「ぼくね、君といっしょに貝がらをさがしに行けるようにって、ずっと思ってたんだよ。」　ハーブは力をこめて言いました。

「今夜ね。引き潮になるんだよ。だからさ、そのときいっしょに行けると思うよ。」　マークはしぶしぶそう答えました。

ハーブとマークはそれから夜までずっと、マークが集めた貝をあれこれと調べました。マークはハーブがあんまりよく貝のことを知っているのでおどろいてしまいました。ハーブは貝にさわるとすぐそれが何という貝か当ててしまうのです。

「これ、何？」　ハーブはひとつの貝のかけらをつまみ上げて、マークに聞きました。

「ジュノニアのかけらさ。」　マークは答えました。「ジュノニアってね。とってもめずらしい貝なんだ。ぼく、ずっとジュノニアを見つけたいと思ってたけど、こんなかけらしか見つからないんだ。この本にジュノニアの写真があるから見せてあげるよ。」

ハーブはポケットから虫めがねを出すと、ジュノニアの写真を観察しはじめました。「これはほんとうにおもしろい貝だね。これいい本だね。図書館にだってこんないい本ないよ。」

ついに10時になりました。マークは胸をわくわくさせながら、バケツと貝ひろい用のくま手、それにかい中電とうを集めました。そしてふたりは海辺の方に歩いて行きました。

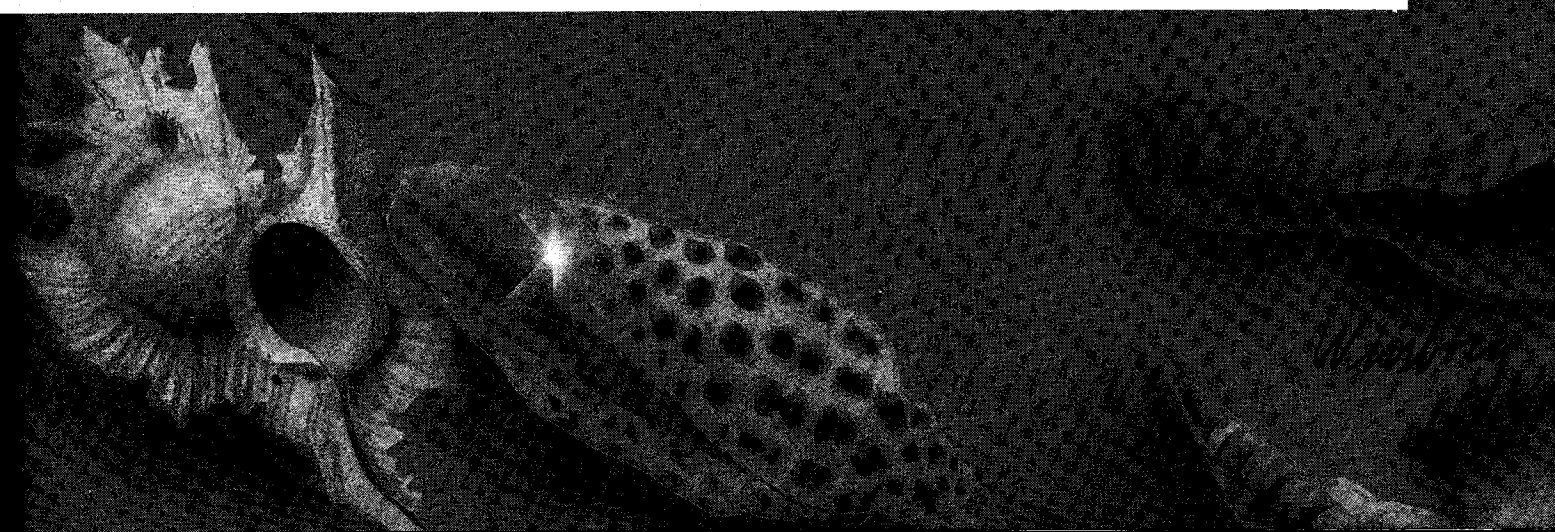
「マーク、ぼくがいると君は早く歩けないだろう。だからぼくは浜辺にすわって君をまっているから、君はひとりで捜した方がいいよ。」

そうはいっても、ハーブがいっしょに行きたいと思っているのを、マークは知っていました。浜辺に向かって歩いているうちに、マークはどうしてもハーブに貝ひろいをさせてあげたいと思うようになりました。いつでもハーブはみんなからおいてきぼりをくっていました。ひとりぼっちにされてみんなをまっていることが、どんなにたいへんなことかが、マークにわかりかけてきました。

「君がいるから早く歩けないだって。そんなことはないさ。かえってゆっくり行った方がいいんだよ。そうすれば何でもよく見えるだろう。」

ハーブはちょっとだまっていました。それから、「ありがとう」とマークに言いました。その声を聞いて、マークは、ハーブが喜んでいるのがわかりました。

ふたりがやっと浜辺にたどり着いたとき、もう潮はずっと遠くまで引いていました。そしてあたり一面、どろどろとした砂地がすがたを表わしていました。あちこちに貝の



山があります。ぐしゃぐしゃした砂の上を歩きながら、マークは形のいい貝がらをひろってはバケツの中に入れました。

急にマークの頭にひとつの考えがひらめきました。「ハーブ、ねえ聞いて。君も貝をさがしなよ。貝がらの山のそばにひざをついてさ、気に入った貝がらが見つかるまでさがすのさ。」

「うわあ、それはいい考えだ。」ハーブはとてもうれしそうに言いました。

貝ひろいをしていたふたりは、ひとつの小さな貝の山のところに来ました。ハーブはその山のところにひざまずくと、手さぐりで貝がらをさがしはじめました。ほんのちょっとの間に、ハーブはツノガイや大きなハマグリ、それにアサガオガイをさがし出しました。

するととつぜん「ああ、ぼく見つけ……」とハーブは大声で言いかけて、あわててだまってしまいました。「あっ、ちがった。かけらだ。ねえ、マーク。この山を見てくれない。たぶんぼく、たくさんいい貝がらを見落としてると思うから。」

マークはその山のところにやって来て、しゃがみこんでさがしはじめました。かい中電とうの光の中で貝がらがきらきら光っています。

「いい貝がらはみんなもう君が見つけちゃったみたいだよ。」少しさがしてからマークは言いました。

「よく見て。」どうしても、と言った様子です。マークは、ハーブがどうしてそう言うのかわかりませんでした。とうとういらない貝がらがいっぱいあたりにちらばりました。マークはこれで最後だと思い、貝がらの山に目をやりました。

そのとき何かがマークの目にとまりました。ジュノニアです！それも完全な形のジュノニアです。マークは自分の目をうたがいました。ジュノニアが、完全な形で図かんで見たのとそっくり同じ形で、今マークの目の前にあるのです。

「ジュノニアだ！」マークはさけびました。

ハーブと浜辺を歩きながら、マークは今あったことを考えはじめました。どうしてハーブはあのジュノニアを見つけなかったんだろう。マークはふしぎに思いました。貝がらの山のてっぺんに近い所にあったのです。ハーブはたしかにあの貝がらに手をふれていたにちがいないのです。

マークは家に帰ると、ジュノニアを標本にすることで頭がいっぱいで、ほかのことはなんにも考えられませんでした。みんながマークによかったねと言ってくれました。でもだれよりも喜んだのはハーブでした。

その夜おそくマークは、ハーブがジェンおばさんに話しているのを聞きました。「貝がらは、もらってもいいけど、でも自分でさがす方がずっとずっとおもしろいね。」

さっきひろったきれいなジュノニアの貝がらを見ながら、マークはハーブが言ったことを考えていました。ハーブはさいしょからジュノニアがあそこにあったのを知っていたんだ。でもぼくが自分でさがした方が、ぼくがどんなに喜ぶかも知っていたにちがいない。マークは思いました。

よく朝マークは、帰りじたくをしているハーブに、きのういっしょに見た貝がら集をわたしました。「ハーブ、この貝がら集もっていきなよ。今度君が来たとき、いっしょにいっぱい貝がらひろいをしようよ。」

ハーブの顔がぱっとほころびました。「それまでぼくはいっしょうけんめい勉強して、君が貝ひろいに行くときにいつでも行けるようにしておくよ。」ハーブは大まじめになって言いました。

マークもほんとうにそうしたいと思いました。そこでマークはこう答えました。「それはいい！ぼく、君が今度来るのがまちきれないよ。」

1．アメリカ合衆国のフロリダ地方の海の深いところにいるまき貝

フィジー諸島の友だちの話

特別な証

ジュリエットはまだ赤ん坊のとき、胃の病気にかかり、1さいになるまで2回も手術をしなければなりませんでした。

あるとき、高熱がでて、全然下がりませんでした。お母さんは必死で看病しましたが、熱はいっこうに下がりません。そこで近くにあった伝道本部に行き、長老たちに娘を祝福してくださいとたのみました。

宣教師たちがジュリエットを祝福し、2、3時間後に見に行ってみると、ジュリエットはすやすやとねむっており、熱も下がっていました。

ジュリエットは2回も初等協会小児病院におせわになりましたが、完全にはよくなりませんでした。けれども祝福を受けることによって、ジュリエットの心はとてもなぐさめられました。

ジュリエットは家族に教会に入るようにすすめました。そしてついに1968年3月に全員がバプテスマを受けたのです。教会の中で人々の愛や幸福を見いだしました。家族は特別な気持をもって、ジュリエットとその証を思い起こしています。そして家族やほかの人にまでよい影響を与えて教会に入るよう導いてくれたことを感謝しているのです。

よい模範

ジェイアントは教会員になる前から教会が好きでした。おじさんが福音のことや、どのようにして自分がインドから来てフィジーの教会の最初の会員になったかなどについて話してくれたからです。

宣教師の話を聞いた後、ジェイアントは教会に入ってもよいかどうか、お父さんとお母さんにたずねました。そしてゆるしがでるとジェイアントは福音にそった生活をし、良い模範を示すことによって、家族の宣教師になろうといっしょうけんめいがんばりました。

まもなくジェイアントのお父さんとお兄さんがバプテスマを受けました。でもお母さんはためらっていました。おばあさんがインドでヒンズー教の大切な職についていたので、もしモルモンになると言ったらどのように思われるだろうと、心配していたのです。しかし、ジェイアントの模範によってお母さんもついに教会に入りました。

今、ジェイアントの家族はフィジーのスバにある支部で活発に働いています。みんなが天のお父さまに仕えることによってもたらされる愛と喜びは口では言いあらわせないほどすばらしいものです。

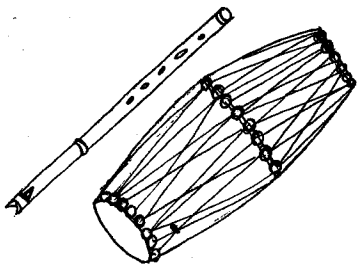
祝福

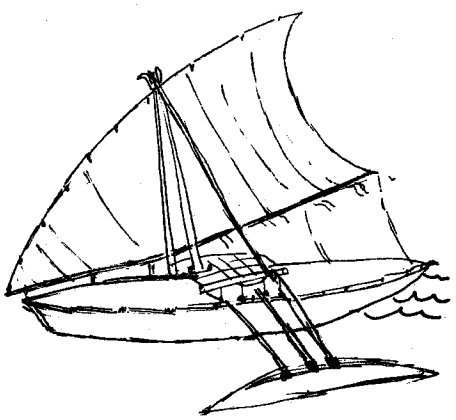
オリパという女の子がフィジー島に住んでいます。2、3年前オリパは、どうしても末日聖徒イエス・キリスト教会に入りたいと思っていました。お姉さんが末日聖徒だったので、オリパもバプテスマを受けたいとお父さんとお母さんに話したのですが、許してもらえなかったのです。

でもオリパが10さいになったとき、教会に入りたいという祈りは答えられました。うれしくてうれしくて、確認の儀式を受けている間なみだが止まりませんでした。天のお父さまはきっとわたしを祝福してくださる、とオリパは思いました。

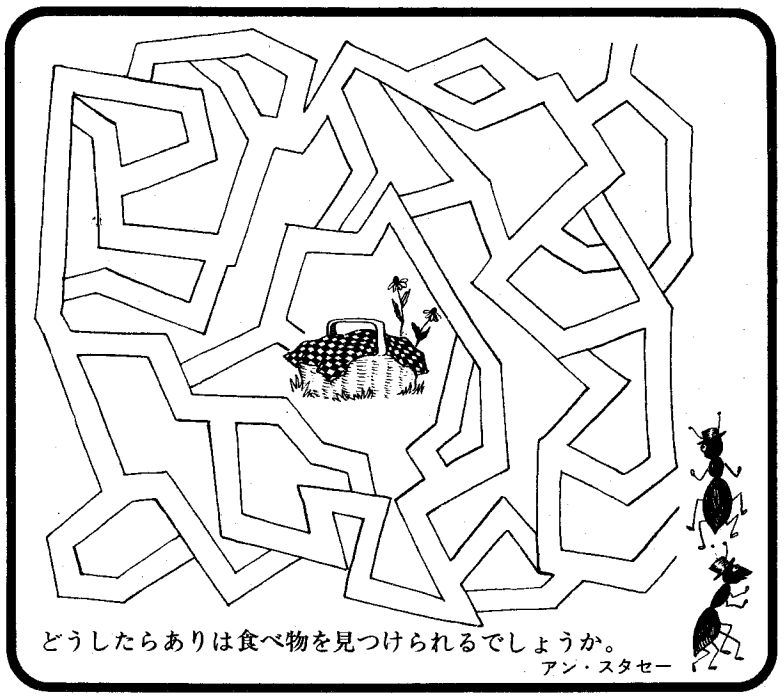
オリパは家でも学校でもできる限りのことをしました。あるとき6年生の子供たち全員に中間テストがありました。テストの結果、オリパはフィジー中の6年生のうちトップだったのです。

その夜お姉さんは家に帰ってくるなりオリパをだきしめ、すばらしい成績をとったことを喜んでくれました。お父さんとお母さんもうれしそうにテストのことをききました。するとオリパはこう答えたのです。「わたしが教会に入ったので、天のお父さまが祝福してくださったんだわ。」





おもちゃばこ



どうしたらありは食べ物を見つけられるでしょうか。
アン・スタセー

人っておもしろい顔してるわね！

点をむすびましょう。　キャロル・コナー
とても役に立つ動物です。

リチャード・H・クレイクラフト

汝がパンを投げよ

伝道が終わるときのことだった。最後の週に入っていて、私はすでにスイスのバーデン支部支部長会から解任され、バーゼル市の伝道本部に1週間滞在するはずだった。

私は早く家に帰りたいとはやりたつ思いだった。一生懸命働いて思い出深い良い伝道ができたのだが、やはり家族のもとに帰る喜びに、胸は大きくふくらんでいた。主は家族に、繁栄と健康と力を祝福して下さっていた。1951年に父が突然視力を失ってから、母がその重圧をいかに立派に乗り越えてきたことか、私はそんな母を誇りに思った。父は時折ふさぎ込んだりしたが、それでも立派に順応し、気持もすっかり立ち直っていた。少なくとも人前では、昔と変わらぬラルフ・クレイクラフトだった。しかしそれからまもなく、父は以前よりも立派な人に変わっていった。大きな障害に出遇っても人々に笑顔を見せ、リハビリテーションに励んで、以前とまったく同じように教会で奉仕した。私はそんな両親を誇りに思い、早く会いたいと思った。

私は最後の一週間を伝道本部で過ごして、その間に残りの仕事を片づけたり、新任の宣教師たちにレッスンを教えて、新しい召しに慣れるように手伝ったりすることになっていた。

今でも思い出すのは、そのうちのひとりの青年のことである。その朝、私たちは一緒に勉強するつもりで、伝道本部の最上階の部屋へ階段を昇っていった。そしてふたりで過ごした間に、彼は、初めは伝道に出る気持はなかった、正直に言うと最初は召しを断わったのだと、打ち明け話をしてくれた。ガールフレンドを残し、長期間休学して伝道を果たすだけの力が自分にあるかどうかと、大いに悩んだという。

それは彼にとっては目の前が真っ暗になるような時期だった。2年以上の間すべてを奉仕に捧げなければならないと考え、これまでとはすべてが変わることを考えると、自分を縛るものを断ち切るのが恐いような、半面断ち切ってしまいたいような、青年たちがよく感じる気持だった。しかも伝道は世を離れた仕事場ではなく闘いの最前線であり、死傷者も何人かは出ることだろう。だが、勝利は栄光に輝いている。

自分でも経験してそのことをよく知っている私は、彼の気持がよくわかった。それで私は、どうして気持が変わったのかを尋ねた。というのも、彼は現に宣教師に聖任されて、私と一緒にスイスのバーゼルにいるからだ。

「それが妙な経験なのです」と彼は述懐した。彼はそれより数ヵ月前に、葛藤に心が張り裂けるような思いで、将来に数々の疑問を持ちながら、ある友だちのワード部の聖餐会に出席したという。それはいつもと変わりない聖餐会だったが、やがてひとりの男性が立ち上がって、力強くしっかりした声で話し出した。彼は大人になってから失明した人だった。その男性は、人生の真理に対するもっと深い洞察の目を主が恵んで下さったこと、それが本当にわかるようになったこと、そしてそのような最もつらいと思われている艱難に遇いながら、人に得られる最も豊かな祝福を自分が得ていることをどんなに感謝しているかと、話したのだ。彼は生涯のすべてを主への奉仕に捧げてきたことを話し、現在主が数えきれないほどの機会を自分の分を越えて恵んでおられると列挙した。

その新任の宣教師はひと息つき、体を動かしてまた話を続けた。彼はその盲人の話に霊感を受け、こう自問したという。「視力というこの上なく大事な賜を主に取り上げられたこのような人が、主の祝福をほめたたえて神の愛を証できるというのに、ささやかな賜を主のみわざに捧げるのを拒む私は、いったい何ということか。」 そしてその瞬間、彼はいったん断わった召しを受け入れる決心をした。彼は家に帰ってから監督の所に行き、心が変わったことを告げた。

「その人の名前は何というんですか」と、私は聞いた。

「知りません」という返事だった。

「私は知っていますよ。」 私は目を潤ませ、顔に笑みを浮かべながら言った。「私はその人を知っています。」

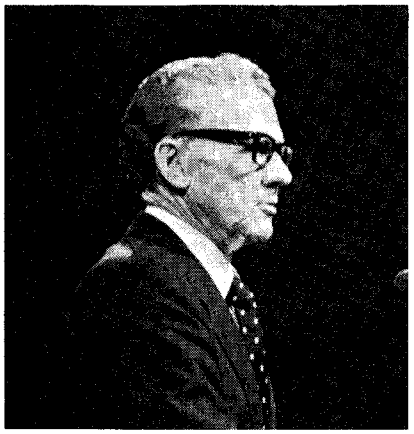
クレイクラフト博士――ブリガム・ヤング大学英語学助教授であり、アメリカの諸雑誌に寄稿も多く、現在は神権会テキストの著作委員。プロボ・イーストステーキ部のボンビルワード部に所属し、ステーキ部高等評議員の役職にある。

1974年10月4日（金）午前の部における説教

断食の律法

この福音の原則を守ることによって、
人は霊的にも、物質的にも繁栄を見る

十二使徒評議員会補助
ヘンリー・D・テイラー



先頃のある集会で、マリオン・G・ロムニー副管長が告げたメッセージに、私は深い感銘を受けた。「かつてそうであり、また今もなおそうであるように、教会の福祉プログラムで現金を必要としている場合、その必要な資金を断食献金から支払うことが教会の希望であり、意図するものである。私たちは現状を改善することができるし、また改善すべきであり、改善していかなければならない。」そして長老は次のような確信ある言葉をもって私たちに励ましを与えた。「私たちが断食献金を今の2倍にすることができるなら、私たちは霊的にも、物質的にも繁栄を見るであろう。これは主が約束されたことであり、記録されている事実である。」

数十年前に、断食の律法を遵守する日が選定された。今も昔もこの律法の遵守の中で最も重要な点は、断食献金への惜しみない貢献であることに変わりない。今日教会は次のような方針を定めている。

「毎月の第1日曜日は、普通、断食と祈りの日として指定され、特別の証会が開かれる。証を述べるのに適切な時間をとるべきである。……

正しく断食日を守るということは、連続した2食の食べ物と飲み物を断ち、断食証会に出席し、援助の必要な人々のため、監督に惜しみなく献金をすることである。断食献金の最少額は、2食と同価値の金額と定義されている。」（「教会指導総合手引き」1968年、P.29）

しかし、教会での断食と証は、初めから日曜日に限定されていたわけではなかった。ジョセフ・フィールディング・スミス大管長はこの律法と原則の過程について興味ある言葉を述べている。

「この神権時代における祈りと断食は、前の神権時代から繰り返されてきたものである。教会の組織された時より、祈りの精神をもって断食の原則を守るように、主は戒めを与えてこられた。ブリガム・ヤングは1867年12月8日、ソルトレーク・シティーの旧タバナクルで説教した折に、次のような証を残している。

『御存知の通り、私たちは毎月の第1木曜日を断食日としている。この日の起源について知っている方はどれ位いるだろうか。什分の一が納められるようになる前、貧しい人たちは寄付金によって支えられていた。彼らはカートランドにいる〔予言者〕ジョセフ・スミスのところへ来て援助を求めた。この時スミスは断食日を決定すべきであると言った。こうして断食日を現在のように1ヵ月に1回行ない、その日に食べるすべてのもの、すなわち穀類、肉類、バター、果実等を断食集会に持参して、貧しい人の世話をするために選ばれた人にそれらを手渡すというものであった。もし私たちが今これを忠実に守るならば、貧しい人は穀類、バター、チーズ、肉類、砂糖等の必要な食料に事欠くことがあるであろうか。いや、周囲にいる貧しい人に与える以上のものを、私たちは貯えることができるであろう。……

木曜日に断食集会を開く習慣はノーブーにおいて続けられ、また教会員がロッキー山脈に到着した後もこの習慣は維持された。私はある商店が断食日に休業し、その入口に「断食集会のために休業します」と札をぶらさげていたのを今でも思い出す。……

第1木曜日から第1日曜日に断食日が移行されたのは、次のような次第による。後に十二使徒評議員会会員に選ばれたハイラム・M・スミスは、1896年英国のニューカッスルで宣教師として働いていた。英国では、断食集会の行なわれる第1木曜日がやってくると、

教会員は仕事を途中から休まなければならなかった。しかもそれは月の給与にも影響した。これらの人たちの幾人かは炭坑で働いていた。彼らは炭坑から出て来るとまず家に帰り、入浴し、そして衣服を着替えねばならなかった。これは時間ばかりでなく俸給の損失でもあった。ハイラムは自分の父であり、当時副管長であったジョセフ・F・スミスにこのことを手紙で知らせ、このような状態においてなぜ断食日を日曜日でなく木曜日にしなければならないのかを尋ねた。スミス副管長はこの手紙を大管長会と十二使徒会の会合へ持参してそこに提出した。次に示すのは、1896年11月5日に開かれた会合の記録から抜粋したものである。

『ジョセフ・F・スミス副管長は断食集会の問題を提示して、断食日を毎月の第1木曜日から第1日曜日に移行することがより効果的であろうという提案をした。これはジョージ・Q・キャノンによって確認され、他の兄弟たちがこの問題について語った後、毎月第1日曜日に行なわれているタバナクルの演奏は廃止されることに決まった。また、ソルトレーク・シティーのみならず、他のワード部の人々も午後2時におのおのの集会所に集い、断食日を守るべきであるということが決議された。』」（「福音の質疑応答」、P.174）

断食集会と断食の律法を守る日の変更に加えて、もうひとつの特筆すべき発展がある。予言者ジョセフ・スミスはカートランドでこのプログラムを始めたとき、聖徒たちにその日に断った2食分の食物を断食集会に持ってくるように勧めた。その後この方法は変更され、現在では教会の執事が毎月担当家族を訪問し、断食献金を現金で集めている。

奇跡は断食と真心からの祈りによってもたらされる。後に教会の大管長となったロレンゾ・スノーがイタリアで宣教師として主イエス・キリストの福音の門戸を開こうとしていた1850年のことである。彼は少々内気で、人前を気にする性格の持ち主だったが、霊的には巨人とも言われるほどの人であった。彼が親しくしていた家族に重病の子がいた。スノー長老は心からの断食と力強い祈りと確固たる信仰によってのみ、この3歳の子を神権の力によって救うことができると感じた。彼はこの少年を癒すことがこのイタリアの小さな部落に住む人々にとってどれほど深い意味があるかということも知っていた。

彼は同僚と共に、アルプス山脈のふもとの人里離れた場所まで登って行き、霊的な断食と祈りによって、神の力を使ってこの小さな少年を癒す特権をたまわるよう6時間もの長い間、熱心に主に乞い求めた。そしてついに、その答えが得られた。彼はその癒しの特権をたまわったのである。

彼は謙遜な主のしもべとして山を降りてきたとき、その瀕死の子供の命が救われるという確かな信仰を持っていた。それから子供に祝福を与え、生命がよみがえるという約束を与えた。数時間後に、スノー長老は同僚とその家に戻ってみて、その子が非常に元気を取りもどし、回復の一途にあることを知った。スノー長老は彼の断食と祈りが恵み深い天父の御座に届いたことを悟った。そこで感謝の念に絶えないその子供の両親に向かって次のように述べた。「天にまします神がこれをあなたたちのためになされたのです。』（エライザ・R・スノー、*Biography of Lorenzo Snow*「ロレンゾ・スノーの伝記」、P.128、129参照）

確かに、断食の律法は霊感を受けたプログラムであり、それを守ることによって多大な徳が得られる。デビッド・O・マッケイ大管長はそれを次のようにまとめている。

「『断食』という言葉はもともと食物に対して自らが慎むという意味であった。断食の習慣は人類の初期の時代にさかのぼることができると歴史家たちは述べている。

その起源がどうであろうとも、この習慣を守るときに、いくつかの徳が付随して得られることを知ることは大切である。…この断食に関連するすべての原則は次のような事実として現われてくるようである。すなわちまず第一に断食は健全な肉体を作る。〔それから克己心、次に他人を助ける機会、ついには〕霊的力強さを与えるものである。

しかし、断食から得られる最も大きな恩恵は、個人の意志からくる肉体的欲望を抑えることによってもたらされる霊的な力である。』（デビッド・O・マッケイ、「福音の理想」、P.208－213参照）

断食日を遵守するための極めて大切な要素のひとつは、断食証会に出席し、私たちの天父が与えて下さる多くの恵みに感謝することである。

断食日を正しく守る要素が4つ考えられる。すなわち食事を断つこと、祈ること、次に証を述べること、そして最後に断食献金を納めることである。

私は私たち各自がより一層の祝福を絶えず必要としていると堅く信じている。主の献身的なしもべであるロムニー副管長が私たちにその方法を示してくれた。従って私たちがそれを守るなら、祝福は必ず増し加えられるはずである。私はもう一度、この霊感された約束を繰り返したい。「私たちが断食献金を今の2倍にすることができるなら、私たちは霊的にも、物質的にも繁栄を見るであろう。』

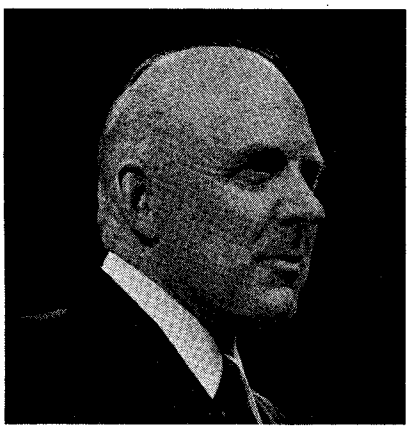
私たちは断食献金を納めることによって、豊かな祝福を得ることができると堅く信じている。そしてこれらのことをイエス・キリストのみ名によって証するものである。アーメン。

1974年10月5日（土）半期総大会神権部会における説教

若者よ、伝道の備えを

私たちはやる気のない宣教師を求めてはいない。自らを備えなさい
あなたがたは必要とされている

七十人最高評議員会会員
A・セオドア・タトル



若人の諸君、私はあなた方の今後の使命について勧告をしたいと思う。私にもかつてあなた方のような少年時代があった。それはあなた方からみれば遠い昔のことのように思えるかもしれない。しかし、私にとってはつい最近のことのようである。あなた方がこれまで歩んで来た一日一日を、否はるかそれ以上の歳月を私は歩んできた。私もひとりの父親である。そしてこれまでの生涯、私は若者たちと共に数々の経験を積んできた。

神の予言者は、今、まさしく今こそ私たちが大きく一歩を踏み出し、伝道の力を強める時であると宣言しておられる。

以前、私はある若者と伝道について話し合ったことがある。そのときこの若者は言った。「私は伝道に出たくありません。」　私は尋ねた。「そのことと伝道とどういう関係があるのかね。私たちは君を必要としているのだよ。」

キンボール大管長は、やる気のない宣教師を求めてはいないと言っておられる。伝道に出たいかどうかが問題ではない。あなた方は必要とされているのである。必要とされていることがどういう意味なのかわかるだろうか。兄弟愛の絆は伝道中に鍛練され、深く強いものとなる。あなた方は、日夜ひざまずいて共に祈りを捧げる同僚への愛を深め、また国籍や生活状況を問わず伝道地の人々を愛するようになるであろう。そして彼らもまたあなた方を愛するであろう。彼らはあなた方を福音をもたらしてくれたが故に愛するのである。

改宗者は自分に教えを授けてくれた人のことはいつまでも忘れないものである。私は多くの改宗者が「私の宣教師」を尊敬する声を耳にしてきた。あなた方のために祈りを捧げる人々がいることを思い浮べていただきたい。それがあなた方にとってどういう意味があるのか理解できるだろうか。それらの人々の祈りは、あなた方の生活にいつも清く汚れのない純粋な思いを与えてくれるであろう。

私たちの周囲には真理を求めている多くの人々がいる。彼らに一番よく真理を教えてあげることのできる人はだれか、それはあなたである。現在はまだ、あなた方若人のうち、わずか1万8千人が伝道しているに過ぎない。19歳から25歳までの6万近い若人はまだその業に携わっていないのである。私たちはもっともっと多くの宣教師を必要としている。伝道はいかなるものにも勝って優先しなければならない。結婚が先立つものでもなければ仕事が優先するのでもない。この召しを果たすためには学業も一時中断されよう。しかし学業と伝道を両立することができるように大学に出席する期間を調整することもできよう。あなた方の中には肉体的な欠陥を負っておられる方もいよう。しかしながら専任宣教師となって伝道に出なくともふさわしい方法で伝道に参加する機会はある。

伝道に出るに際してまず考慮されることは、あなた方の道徳面での資格である。霊的強さが求められるこの時代に、私たちは性格の脆弱な人物は望まない。勉強していただきたい。色鉛筆とモルモン経を用意し、自分にとって大切な聖句に線を引きなさい。伝道の業を進めるもうひとつの道具は外国語である。何かひとつ学びなさい。私たちは「……諸々の国語と諸々の言葉と国民とに通じ」（教義と聖約90：15）なければならない。

絶えず祈る習慣を身につけなさい。朝な夕なにひざまずき、主に近くなりなさい。「教会の前を通りかかると、私はいつも足を止めて中に入ります。ですから私のひつぎが運ばれて来たとしても、主は『それはだれか』とはお尋ねにならないでしょう。」　こう言った若者のようになっていただきたいと思う。

若者は食欲旺盛でよくお腹がすくが、宣教師であれば殊さらそうである。いろいろな料理の作り方を学んでおきなさい。食事の後片付けやボタンのつけ方も身につけておきなさい。これは何も「女性だけがすること」ではない。伝道に出ればそのような同僚は得られない。もしあなたができなければ、多分あなたの同僚もできないであろう。だが当然のことながら、私たちはあな

たの母親に付添って行ってもらうわけにはいかないのである。

宣教師の部屋の中には、非常に雑然とした部屋がある。それは小さい頃から整理整頓という習慣を身につけていないからである。もちろん、今からすぐに、しかし少しずつ行ないなさい。そうしないと母親はびっくりしてしまうだろう。靴をいつもきれいに磨き、ズボンはきちんとプレスしておきなさい。また洗濯の仕方や糊づけ、ワイシャツの衿や袖口のアイロンのかけ方も習っておくこと。

流行は生まれては廃れるものである。喜ばしいことに、うす汚ないヒッピースタイルは私たちの前から消えようとしている。自分の服装に誇りを持っていただきたい。今からすぐ教会の標準にかなった服装、身なりをするようにした方がよい。今、もう少し短かく髪を刈っておけば、後で大したショックも受けずに済むであろう。そうすることによって外見が見直されるだけでなく、事実あなたの心に何らかの変化がもたらされる。流行を取入れたり、気軽な格好をするとき、品性を損なってはならない。主を礼拝しに行くとき、私たちは持っている衣服のうち最高に美しく清潔で立派なものを身につけるべきである。あなたの父親がまたこのことについて一言口をはさむことがあったとしても、よく耳を傾けておかねばならない。

あなたはどこへ伝道に行くだろうか。あなたが普通の人間であれば、そして私たちはそうであるように望んでいる（事実それは条件のひとつである）が、あなたは遠い外国の地に行きたいと思うであろう。あるいはあなたのお父さんが伝道した所に行きたいと思うであろう。それはごく当り前のことである。この教会の中には、本当の伝道地はただひとつ、それは自分の父親がかつて伝道した地であると考える若者もいる。在りし日の伝道について話すときの父親に気づいたことがあるだろうか。あの懐かしそうな様子、目を明るく輝かせ、そのうち眼鏡をはずしてうるむものをぬぐわなければならなくなってしまう。奇しき伝道生活の思い出からのみ湧き出る、そのほのぼのとした喜びは、当然すべての男性が受けて然るべきものである。このような先人の後を追って、あなた方も召された地に赴くのである。

現在、伝道費用は1ヵ月当り約130ドルかかっている。伝道を終えるには3～4千ドル必要であろう。あなた方の中にはそれだけの準備ができていない人もいるが、それだけは用意しなければならない。主はあなたとあなたの家族を助けて下さる。早々にお金の準備を始めなさい。お父さんに相談してパートタイムの仕事につきなさい。一生懸命働きなさい。そしてお金を貯えなさい。あまりにも多くの男の子たちが遊びすぎやテレビの見過ぎで、怠け者になっている。口座を開いて貯金をしなさい。私がここで注意しておきたいのは、伝道資金をオートバイやステレオ、レコードなどに費やして浪費しないように、またそのような物を購入することが「投資」だと見なして伝道に出る直前に換金する方が合理的だと考えないように。自らを制し、ひとつの目的のもとにお金を貯えたという経験は伝道中に必ずや最大の祝福となって返って来るであろう。できることをすべて成し終えると、あなたは監督の面接を受けに行くことができる。監督は何か助けとなる提案をしてくれるだろう。

伝道を終えて帰るとき、あなた方は2つ年を取ることになる。しかしながら、今肖あなた方はそれが大した問題ではないと思うであろう。私はあなた方に自信をもってこう言うことができる。伝道の経験はあなた方を大きく変える。従って求愛や結婚を遅らせるのは賢明なことである。結婚するまでに交際する相手を変えることもできるからである。実際、多くの人はそうしている。もちろんその選択は男性側で行なわれる場合もあるし女性の側で行なう場合もある。

伝道したからと言って幸福ですばらしい結婚が約束されているとは限らないが、伝道の経験が生活上の多くの事柄を解決へと導き、それが結婚に影響を及ぼすことはある。伝道に出て成長すれば、祭壇の向こう側にひざまずく伴侶として、あなたはさらに良い人を見出すことができるであろう。

さて、若人の諸君、私はあなた方に警告しておく。伝道のことを考えない女性に気をつけなさい。悩ませたり誘惑したりして伝道に対するあなた方の思いをくじこうとする女性に注意していただきたい。あなた方は気をつけた方がよい。あなたはこのような女性を永遠の伴侶に望むだろうか。もしそのような女性であるならば交際を終りにした方がよい。

あなた方は証を得てそれを述べるに若過ぎるということはない。あるステーキ部大会で、私たちはひとりの若い女性を呼び、話をお願いした。彼女はクモラの丘の野外劇から帰って来たばかりで、燃えるような証を述べてくれた。彼女の後、私たちは17歳のゲーリーという少年を呼んだ。彼は自分の名前が呼ばれたとき、驚いたようだったが、6フィートの体を背をまっすぐに伸ばして説教壇の方にやって来た。最初は二言三言、「私はなぜステーキ部長が私を呼ばれたのかわかりません。それに私は証もないのです。」（明らかに前に述べた若い女性の証と比較しながら）と言っていたが、そのうちセミナリーについて話し始め、家族への感謝の気持を述べて、「私は福音が真実であることを知っています。イエス・キリストのみ名により申しあげました。アーメン」と言って結んだ。

証は聖霊の賜と力を通して芽生える。私たちは証を述べるとき証を得るのである。機会をとらえて、いつでも証をしなさい。証を得たいと望み、捜し求めるなら、証を得るであろう。証を述べること、それは何物にも勝って人々に大きな影響を及ぼすのである。そこにあなたが召されて、生ける予言者と共に、イエスがキリストであり、ジョセフ・スミスが予言者であり、この教会が真実であることを証する理由があ

る。

ここにお集りの方で、フットボールチームのキャプテンや卒業生総代、生徒会会長、またそれらを兼任している人は少ないであろう。あなたは自分が外向的でない、成績もそろって良いわけではないと思っている。そして伝道に出る資格が得られるかどうかわからず迷っている。若人の皆さん、主に仕え、福音を宣べ伝えたいという望みをしっかりと心に刻んでいただきたい。「なぜならば、人が死を願うのにも生を願うのにも神はこれに応じたまい、……神はこれを許したもうと言うことを知っているからである。」（アルマ29：4）私はこの約束が本当であることを知っている。主はあなた方を愛しておられる。主はあなた方を必要としておられる。自分の希望通りの属性は得られないかも知れない。しかしあなた方は大きな可能性を秘めている。あなた方の中にはあやまちを犯したことのある人もいよう。またよくない習慣で悩んでいる人もいよう。その人は今夜、主のみ前にそれらのことを告げなさい。もし非常に悩んでいるならば父親のところに行って話しなさい。また監督に会う必要があるかも知れない。今すぐ解決しなさい。

教会において偉大な宣教師というのはいつの時代も、謙遜な人、すなわち正直にこつこつと働いて代価を支払う人、主に近く生活して主に信頼する人、であった。あなた方もその偉大な宣教師のひとりに数えられることができる。どうか今夜その決心をして欲しい。

改宗者と共にバプテスマフォントの中に立ち、右腕を直角にして上げ、次の言葉を宣言する姿を思い浮かべていただきたい。「われはイエス・キリストより権能を受けたれば、天父と御子と聖霊との御名に由りて汝にバプテスマを施す、アーメン」（教義と聖約20：73）

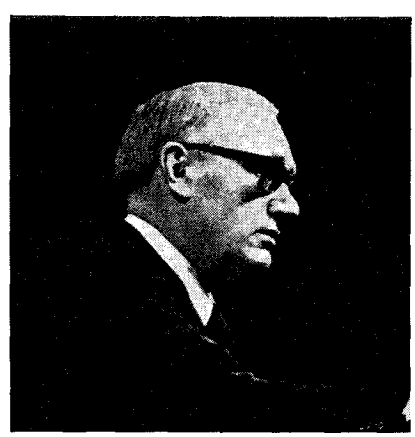
風を切り雪をけたてて山の斜面を一気に滑降すること、決勝のテープを切ること、レフト観覧席にホームランを打ちこむこと、あるいはノーヒットに押えること、あなた方をわくわくさせることは多くある。

だが、日記帳に「今日、私たちはブラウン御家族全員にバプテスマを施した。本当にすばらしい家族だ」と書くときの穏やかながら、涙さえこみあげてくるあの一瞬に匹敵する気持はなかなか味わうことができないであろう。

私は神が生きておられ、イエスがキリストであり、ジョセフ・スミスが予言者であることを知っている。またスペンサー・W・キンボール大管長は今日、この地上における生ける予言者であることを知っている。イエス・キリストのみ名により、アーメン。

1974年10月4日（金）午前の部における説教

私たちの大切な家族



両親には家族を強める権利と義務がある

七十人最高評議員会会員
ローレン・C・ダン

タバナクル合唱団の今の歌で、何というるわしい平安がかもし出されたことか。兄弟姉妹の方々、今朝この大会に臨席して、神の予言者から指示と教えを受けることは栄誉である。キンボール大管長が神の予言者であり、現在の地上における主の正当な代表者であって、今朝彼から受けた教えと勧告に従う人々は、実際の経験から、彼の

語ったことが確かで、人類を強め、高めてくれる良いことであることを知るだろう。私はそれを証する。スペンサー・W・キンボール大管長は神の予言者である。

私は話の手がかりとして、キンボール大管長が先日話された言葉と、今朝提起されたテーマを取り上げたいと思う。彼は「国家は国民の家庭を基盤として成り立ち、家庭は一人一人の家族を基盤として成り立つ」と語った。

父母と子供から成る家族は制度としては最古のものであり、文明の基盤を成すものである。家族ほどに末長く尊いものはありえない。しかしながら、家族内における両親の役割を従来よりも高める必要があるのは、みるからに明らかである。

私は数年前に地域社会の指導者や実業各界の面々と共に、公用でカナダ東部へ旅行したときのことを思い出す。一日の仕事を終えて一緒に夕食を取ったが、その晩はだれもがくつろいで盛んに団らんした。そのうちひとりの人が、とりたてて理由もないのに自分の息子のことを話し出した。彼がその息子を心から愛していることは、傍目にもよくわかった。ところが、彼と息子とは折が合わず、絶交状態のようにすらなっていて、何とかしなければならないのは重々承知しているが、どうしてよいやら皆目わからないとのことであった。

それを聞くと、テーブルを囲む人たちから同じような話が次々と出た。彼らはいかにもそのような話をしなれていない風だったが、だれもが家庭生活のどこかに心配事を持ち、特に子供に関する問題が多かった。

私たちは変動の時代に生きているが、親の子を思う心は昔も今も変わらないと思う。社会の基盤が家族であるとするなら、幾つかの基本原則が再確認されなければならないのであろう。

第一に、両親は子供の態度、行動を形成する権利を持ち、同時に権利のみならず責任も持つことを認識すること。

第二には、労働の原則、労働の倫理と言ってさしつかえないならば、それを親が家庭内で教えることである。家庭で教えないとしたら、いったいどこで労働の尊厳を教えられるだろうか。

そして第三は、家族に道徳的、霊的気風を作り出し、達成と心の平安を得る手段として神よりの原則を守ることの重要さを認識するよう、教えることである。

さて、まず子供の態度、行動を形成する親の権利について。これは本質的に神の権能である。神はアブラハムについて、「アブラハムは必ず大きな強い国民となって、地のすべての民がみな、彼によって祝福を受けるのではないか。わたしは彼が後の子らと家族とに命じて主の道を守らせ、正義と公道とを行わせるために彼を知ったのである」（創世18：18，19）と言われた。神は子供を教えるアブラハムの忠実さのゆえに、彼を多くの子孫の長とされたのである。

世間には、このような親の力は子供の自由を束縛すると言う者があろうが、それはまったく反対である。私は数人の少女が友だちの親について話をしているのを小耳にはさんだことがあるが、年に似合わずしっかりしたひとりの少女が「彼女の御両親は彼女を愛していないのよ。だって好き放題のことをさせているんですもの」と言い、別の少女たちもそれにうなずいていた。

「ニューヨークタイムズ」誌に掲載され、後に「リーダーズダイジェスト」に圧縮されて載った記事の中で、ウィリアム・V・シャノン氏が次のように述べている。「アメリカの子供たちは……一様に親の失敗から被害を受けている。多くの父親、母親は言動によって、自分たちが不安で茫然自失の状態であることを露呈している。……多くの親が自分自身の価値観について葛藤を覚え、確かな価値観をもっていると考える者も、その価値観に従ってしつけるだけの自信に欠けている。……」

彼の言葉によれば、欠けているのは子供の成長についての知識ではなく、確信である。遺伝は子供の成長に何らかの役割を果たすが、それよりも大きな影響を及ぼすのは、「親が十分に子供に心を配り、必要な価値をあくまでも擁護するかどうか」である。著者はまた、父親も母親も家族と家庭の責任を第一に考える必要があると述べている。「育児は私たち大半にとって、一番に大事な仕事である。」

彼は次のようにも言っている。「自分の信念に従い、毅然として子供を育てない親は、自分で成長する自由を子供に与えるのではなく、他の子供やテレビ、映画といったメディアに仕事をまかせてしまっているのである。」（ウィリアム・V・シャノン　『子供にどんな価値体系を教えられるか』「リーダーズダイジェスト」　1972年5月号〔英文〕P.187，88）

家庭内で学ぶべき最大の原則は、愛である。両親が愛をもって導き、影響を与え、励むならば、家族のそれぞれはこの原則を自分自身のものとするであろう。愛の原則は、子供を育てる上での数多い親の失敗を埋め合わせることができる。しかし、愛と自信のなさを混同してはならない。

第二の、労働の原則を家庭内で教えるということについて。少なくともアメリカ合衆国においては、ストレスと緊張の問題が平均労働時間の減少に伴って逆に増加の傾向をたどっていることを示唆する事実が出ている。労働以外の余暇時間が個人のストレスと緊張

の主因となっているのではないかという指摘である。

私はある小さな町で少年時代を過ごしたが、父は私たち兄弟に労働の原則を教える必要があると考え、自分が育った町はずれの小さな農場に働きに行かせた。父は地元の新聞社を持っていたため、私たちとゆっくり過ごせるのは早朝と夜だけだった。まだ十代のふたりの少年にとってはその仕事は実に大きな責任で、私たちは時々失敗もした。

小農場のまわりは別の農場に囲まれていたが、ある日ひとりの農夫が父のところへ行き、私たちの仕事がいかに不手際かを話して聞かせた。父はじっくりと話を聞いたあとでこのように言った。「ジムさん、おわかりでないですな。私が育てているのは牛ではなくて、息子たちなんですよ。」父の死後、ジムから聞いた話である。牛ではなく息子たちを育てようと心に決めた父に、私はどんなに感謝したことか。私たちは失敗もしたが、農場での仕事を覚えることができた。また、両親の口にこそ出なかったが、私たちが父母にとっては牛よりも大切なこと、ほかの何よりも大切なことを、私たちはいつも感じていたように思う。

どの家庭でも、家族は全員能力に応じた責任を受け持ち、同時に労働の尊厳と満足を学ぶことができる。

第三の点は、親には子供に道徳的、霊的な原則を教える権利があるということである。これについては、近代の聖典から引用したい。「また、シオンまたは組織せられたるシオンのステーキ部内にて子供を有する両親あらば、その子供八歳の時、悔改め、生ける神の子キリストの信仰、バプテスマと按手による聖霊の賜などの教義を教えて理解せしめざれば、罪その両親の頭に留るべし。」（教義と聖約68：25）

ジェラルド・フォード大統領は合衆国議会における初の演説で、この普遍の真理を述べた。「もしも我々が現代の複雑な社会で、民族代々の道徳的知恵を……立派に行使できたならば、警官や検察官の……阻止できる数を上まわって犯罪や堕落を防止できるだろう。」そしてさらに、「これは政府ではなく、家庭から始めるべき仕事である」と。（*Christian Science Monitor*「クリスチャン・サイエンス・モニター」1974年8月28日）

先ほど述べた「リーダーズダイジェスト」の記事の中で、シャノン氏はこう言っている。「聖書の時代以来人類が蓄積してきたかけがえのない道徳の知恵を、何物も無効にできなかった。殺す、盗む、嘘をつく、人の物をむさぼるなどは、いまだに犯人にも犠牲者にも何がしかの悲劇をもたらす。……『汝姦淫するべからず』は古めかしく聞こえるかもしれないが、しかし今の言葉に置き換えてみて『他人の家庭生活を崩壊に導いてはならない』と言えば、これはいまだに価値ある教えである。」

シャノン氏は自制と前もって手だてを打つことの徳をも指摘した。十代も後半になって性に関する事実を知るとき、自制できれば何の害にもならないだろうと言う。

「ある程度の欲求不満や精神の緊張はがまんできるものだ。かえって良い効果がある。人間の被る苦悩の中で欲求不満にコレラ以上のランクをつけるのは、現代アメリカ人だけだ。」（「リーダーズダイジェスト」　1972年5月〔英文〕P.189，90）

今まであげたのは、家庭生活で強調されるべき数々の原則のほんの数例である。

次に問題となるのは、両親はいかにしてこれらを実現できるかということである。教会員にとって、家族で交流と教育を始めるのは、家庭の夕べである。月曜の夜は何をさておき、家族のために取っておくこと。父親が指導するが、家族にも準備させ、参加させるのである。言うことや行なうことはそれぞれの家族の必要に応じて異なるはずである。両親が子供たちに道徳や宗教の原則を教え、それを日常生活に応用できるように、教会から手引書が発行されている。

それと同様の活動を取り入れたいという非教会員に対しても、教会は援助の手を差し伸べている。あなたがたの近所には、家庭の夕べの開き方についてよく教えを受けた専任宣教師や非専任宣教師がいるが、彼らは何のあても期待せずに喜んでお宅にうかがい、この活動を御紹介する。これは、各家庭のために用意された末日聖徒イエス・キリスト教会の奉仕活動である。私どものただひとつの注文は、その席に全家族が集まること、特にこの活動の鍵を握る父親あるいは家族の長が必ず出席すること、それだけである。

もちろん、その若い宣教師たちが再度訪れてイエス・キリストの福音の原則をお教えする用意はあるが、しかしそれを望まないならば、それはそれでまったくさしつかえない。教会外の多くの家族にすでに取り入れられて役立っているこの活動を、御紹介するだけである。

実業界の指導者たちも、この家庭の夕べの活動に注目し、社員に勧めている。家庭がうまくいけば、仕事も向上するからである。

私たち両親が、人生の何たるかを子供に教え導く権利のあることに目覚め、労働の尊さを、教え、家庭に道徳的、宗教的原則を確立できるよう、イエス・キリストのみ名により、主の祝福を願い祈るものである。アーメン。

1974年10月4日（金）半期総大会午後の部における説教

信仰の戦いに雄々しくあれ

イエスの証に雄々しくあるためには福音の律法のすべてに従順でなければならない

十二使徒評議員会会員
ブルース・R・マッコンキー

パウロの書簡の中に次のようなチャレンジがある。

「しかし、神の人よ。……義と信心と信仰と愛と忍耐と柔和とを追い求めなさい。信仰の戦いをりっぱに戦いぬいて、永遠のいのちを獲得しなさい。」（Ⅰテモテ6：11，12）

私たちの同胞である使徒パウロがそのように書き送ったのは、神の子を救い主として受け入れ、キリストのくびきを身に負い、主に仕え主の戒めを守ることをバプテスマの水の中で誓約した人々に対してであった。私たちもそれと同じことを、キリストの名を身に受け、真理と義の大義に与したすべての人に申し上げたい。雄々しくありなさい。立派に戦い抜きなさい。そして真理を固守し、戒めを守り、世に打ち勝ちなさい。

自らも世と敢然と戦い、勝利を収めたパウロはこう語っている。

「わたしは戦いをりっぱに戦いぬき、走るべき行程を走りつくし、信仰を守りとおした。今や、義の冠がわたしを待っているばかりである。かの日には、公平な審判者である主が、それを授けて下さるであろう。わたしばかりではなく、主の出現を心から待ち望んでいたすべての人にも授けて下さるであろう。」（Ⅱテモテ4：7，8）

私たちは主の教会の会員として、激裂な戦いを経験しつつある。私たちはキリストの大義のために、サタンやその他、世のあらゆる肉欲や悪と敢然と戦う者の中に数えられた。そして味方のために敵を打ち砕くことを誓ったのである。敵味方を見誤るようであってはならない。私たちの同胞であるもうひとりの使徒はこう書いている。

「不貞のやからよ。世を友とするのは、神への敵対であることを、知らないか。おおよそ世の友となろうと思う者は、自らを神の敵とするのである。」（ヤコブ4：4）

この大戦争は今、地球上の至るところで熾烈を極め、不幸にも傷つく者は多く、中には死に至る者さえもいる。だが、この戦いは今に始まったのではない。悪の軍勢が人間の自由意志を滅ぼそうとし、ルシフェルが、全能の父が打ち立てられた進歩と成長の道から離れて私たちを連れ去ろうとしたとき、天上で戦いが起こったのである。

その戦いは地上でも続いている。悪魔は今なお教会をのろい、「神の戒めを守り、イエスのあかしを持っている者たちに対して、戦いをいどん」でいるのである。（黙示12：17）

それは今も昔も同じである。そして聖徒が悪魔とその軍勢を打ち負かすことができるとすれば、それは「小羊の血と彼らのあかしの言葉」によるのであり、また「死に至るまでもそのいのちを惜しまない」ことによるのである。（黙示12：11）

さてこの戦いに中立はないし、またありえない。主の教会の会員はどちらか一方を選ばなければならない。ここで戦う兵士は、パウロのように勝利者となり「義の冠」を受けるか、さもなくばパウロが言うように、主が「神を認めない者たちや、わたしたちの主イエスの福音に聞き従わない者たちに報復」される日に「主のみ顔とその力の栄光から退けられて、永遠の滅びに至る刑罰を受ける」かどちらかである。（Ⅱテサロニケ1：8，9）

またこの戦いで勇気をもって雄々しく戦おうとしない者は、それだけで敵に助勢したとされる。「われにくみせざる者はわが敵なればなり。」（Ⅱニーファイ10：16）

要するに私たちは、主の教会につく者となるか敵対する者となるか、すなわち主の民の中に数えられるかそれとも罪の報いを受けるか、どちらか一方を選ばなければならない。片足を教会に置き、もう一方の足を世に置いていたのでは霊的な救いは得られないのである。私たちは選ばなければならない。教会か世かどちらか一方を。中間はない。そして主の愛されるのは、主の軍勢に名を連らね、堂々と勇気をもって戦う雄々しい人である。

古代の教会のある会員たちに、主は言われた。

「わたしはあなたのわざを知っている。あなたは冷たくもなく、熱くもない。むしろ、冷たいか熱いかであってほしい。このように、熱くもなく冷たくもなく、なまぬるいので、あなたを口から吐き出そう。」(黙示３：15,16)
日和見主義者は、戦いが激しくなると退却してしまう。そのような人は勝利の冠を得られようはずがない。世に負けているのだから。

証があり、清く正直な生活している教会員でも、雄々しくなければ日の光栄の王国を受け継ぐことはできない。彼らが行くのは星の栄である。次のような啓示がある。「これらの者はイエスの証詞をなすに雄々しからず、この故に彼らはわれらの神の王国の冠を得ざるなり。」（教義と聖約76：79）

イエスはこう言われた。「手をすきにかけてから、うしろを見る者は、神の国にふさわしくないものである。」（ルカ９：62）

「イエスの証詞」とは何だろうか。また雄々しくあるために、私たちは何をしなければならないのだろうか。

「あなたは、わたしたちの主のあかしをすること……を、決して恥ずかしく思ってはならない。むしろ、神の力にささえられて、福音のために、わたしと苦しみを共にしてほしい。」（IIテモテ１：８）パウロはそうテモテに書き送った。また愛弟子ヨハネに神のみ使いが語っているように、「イエスのあかしは、すなわち預言の霊である。」（黙示19：10）

主の証！イエスの証！何と栄光あふれる深遠な概念であろうか。それは天父と御子と永遠に共に住む栄光と名誉への扉を開いてくれる。イエスの証とは、キリストを信じ、その福音を受け入れ、律法に生きることにほかならない。

イエスは主である。アダムの堕落によってもたらされた肉体と霊の死を贖うためにこの世に来られた、神の御子である。イエスは血をもって私たちを買い取って下さった。イエスは復活であり命である。そして「死を滅ぼし、福音によっていのちと不死とを明らかに示されたのである。」（IIテモテ１：10）　主は私たちの救い主、贖い主であり、天父と私たちとの仲保者である。「神は唯一であり、神と人との間の仲保者もただひとりであって、それは人なるキリスト・イエスである。」（Iテモテ２：５）

救いはキリストにある。この名こそ、私たちに復活という何にも換えられない賜を勝ち得させてくれる天が下におけるただひとつの名なのである。主なくして復活はなく、全人類は永久に滅び去るであろう。また永遠の生命はなく、慈悲深い天父のみもとに帰ることも、日の栄の冠をいただくことも、かなわぬこととなるに違いない。

主によりもたらされたものは数多い。しかしその一部始終については、いかなる言語をもってしても語り尽くせず、いかなる心の目をもってしても見えず、またいかなる思いをもってしても推しはかることができないのである。

「ほふられた小羊こそは、力と、富と、知恵と、勢いと、ほまれと、栄光と、さんびとを受けるにふさわしい。」（黙示５：12）

キリストが神の御子であること、およびキリストが救いの徳を持ちたもう御方であることについての完全な証は、主の完全な福音が完全な状態で与えられるまでは存在しない。そしてその福音への証は聖霊からの啓示により得られる。聖きみたまが私たちの内にある。霊に語られたとき、私たちは啓示されたメッセージが真実であることを絶対的な確信を持って知るのである。

証とは、イエスがキリストであること、またジョセフ・スミスとその後継者たちがキリストに関する知識と今の世の人々の救いとについて啓示する人人であること、そして末日聖徒イエス・キリスト教会が地上における神の王国であり、こここそ救いを見出し得る場であることを、啓示を通して知ることである。

イエスの証は予言のみたまであり、聖霊の賜である。そしてそれが完全な形でもたらされるのは、主の教会の忠実な会員に対してである。イエスの証は常に聖霊を伴侶とする人のために備えられている権利であり、また人を予言者に任命する。天賦の霊の賜なのである。そしてこれはモーセの祈りを成就するものである。「主の民がみな預言者となり、主がその霊を彼らに与えられることは、願わしいことだ。」（民数11：29）

では、イエスの証に雄々しくあるとはどういう意味だろうか。

それは、勇ましく大胆であるということであり、世との戦いに力と精力と能力をすべてつぎ込むことであり、信仰のために敢然と戦うことである。「強く、また雄々しくあれ。」そう主はヨシュアに命じたまい、続いてその強さと勇気が、主の律法の中に記されているあらゆる事柄を心の中に思いはかり、かつ従順に実行に移すことにあると説明された。(ヨシュア１：６－９参照)
義の大義を全うするにあたって大いなる要石(かなめ)となるものは、完全なる福音の完全なる律法に従順に従うことである。

イエスの証に雄々しくあるには、「キリストの御許に来てキリストによって全く」なり、「すべて神のみこころに背くことを捨て」、「勢いと心と力とをつくして神を愛する」ようにしなければならない。（モロナイ10：32）

イエスの証に雄々しくあるには、キリストとキリストがもたらされた福音に対して揺るぎない信仰を持たなければならない。すなわち地上で行なわれている業が真実神の業であることを知ることである。

しかしこれがすべてではない。イエスの証に雄々しくあることには、信じることや知ること以上のものがある。私たちは聞くだけの者ではなく、行なう者とならなければならない。雄々しいということは口先だけの奉仕とは違う。救い主が神の御子であることをただ口に出して言うだけでは不十分なのである。従順、確信、そして自分自身が義しい生活を送ること、これが雄々しいということである。

「わたしにむかって『主よ、主よ』と言う者が、みな天国にはいるのではなく、ただ、天にいますわが父の御旨を行う者だけが、はいるのである。」（マタイ７：21）

イエスの証に雄々しくあるには「こ

れからもキリストを確く信じて疑わず、完全な希望の光を抱き、神とすべての人とを愛して強く進まなければならない。」そして「終りまで堪え忍ぶ」のである。（IIニーファイ31：20）それは私たちの信じる宗教に生きること、すなわち説くことを行ない、戒めを守ることなのである。そして「困っている孤児や、やもめを見舞い、自らは世の汚れに染ま」らず、「清く汚れのない信心」を生活の中に具現することである。（ヤコブ1：27）

イエスの証に雄々しくなるには、情欲を抑え、欲望を制し、世俗的な悪しき物事から離れていなければならない。それこそ世に打ち勝つことであり、私たちの手本であり、神の子の中で最も雄々しい御方がなされたことである。それは道徳的に清くあることであり、什分の一や他の献金を納めることであり、安息日を尊ぶことであり、心に目的を抱いて祈ることであり、必要とあらばすべてを犠牲にすることである。

イエスの証に雄々しくなるには、あらゆる点で主の側に立たなければならない。主が選びたもうように選び、主が考えたもうように考え、主が信じたもうように信じ、主が語られるように語り、主が行なわれるように行なうのである。そしてキリストが天父とひとつであるように、私たちもキリストの思いを内に抱いてひとつにならなければならない。

私たちの教義には、あいまいな点が全くない。時にはその明確さ故に、実生活への応用に困難を感じることさえある。しかし次のようにして心に深く考えてみたら助けになるかもしれない。

もしも自分の関心が神の王国の建設よりもこの世の宝を貯えることの方に注がれていたら、イエスの証に雄々しくあると言えるだろうか。

生活に余裕があり、それでいて伝道活動や神殿の建設、困っている人の援助に力を貸さないとすれば、それはイエスの証に雄々しくあると言えるだろうか。

教会や教義を知るためのいろいろな働きかけをする場合、知識のみを用いるとすればそれはイエスの証に雄々しいだろうか。身をもって霊的な事柄を経験するよりも教義の一つ一つを取って論議を戦わす方に関心がある場合はどうだろうか。

神権を授ける資格について教会が取っている方針を憂慮し、この教義に対して、今や新たな啓示が必要な時だと考える人は、イエスの証に雄々しくあると言えるだろうか。

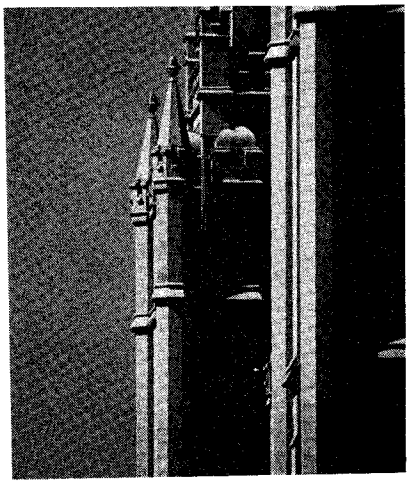
週末に船で遠出したり、別荘へ出かけたり、その他いろいろな娯楽を追い求めて日曜日の霊的な責任を怠る人は、イエスの証に雄々しいだろうか。

賭け事やトランプをし、ポルノ映画を見に行き、日曜日に買物をし、その他世の人々が受け入れているあらゆる事柄を行なう人は、イエスの証に雄々しいと言えるだろうか。

もしも私たちが救いを得たいと望むのであれば、生活の中に、まず神の王国に関する事柄を取り入れなければならない。私たち主の教会の会員にとって、行きつく先は神の王国か、さもなければ無であるに違いない。私たちは暗闇から抜け出た。そしてキリストの驚くべき光の中にいる。光の中を歩もうではないか。

さて、私は将来を予測するつもりはないのだが、しかし心に強く感じていることがある。それは、世の状態がこれから先、良い方向には向かわないのではないかということである。世情が邪悪の一途をたどって遂には人の子の再臨を迎えるであろう。そして世の終わりとなり、悪しき者は滅ぼされるであろう。

私は世の中がますます邪悪になるにつれて、少なくとも教会員の中で忠実な人々はますます良くなっていくと思う。そしてかつてなかったほどに数多くの責務を負わなければならない日が来るであろう。その責務とは、正しい選択をすることであり、教会を擁護することであり、戒めと教えと原則を固守することであり、キリストがその教義を教え、世の人々に証をするために召したもうた使徒や予言者の勧告に耳を傾けることである。このことが他のいかなる事柄よりも、またこの神権時代のいかなるときよりも必要とされる日が来るであろう。



さて、これは主の業であり、神の業である。私たちの天父の事業である。そこには主のみ手がある。それ故にこの世の中でイエス・キリストの福音ほど大切なものはないのである。それは救いを得させる神の力であり、もし私たちが常にまた永遠に、福音とその大義の内に歩み、生き、行動し、呼吸し、考えるならば、この世においては平安と喜びと幸福を得、来たるべき世において永遠の栄光へと進むことができるであろう。

私たちは教え、そして証する。私たちはきょう、永遠の真理の原則について教えてきたが、それは聖霊の力を通して教えるすべての人に証を述べる特権を与えてくれる。その証とは、私たちが宣言してきた教義は真理であり、もしも人がその教えに確信を持ち、それに従って生きるならば、慈悲深い天父がその人に授けたいと思っておられた祝福はすべてその人のものとなるということである。

私はこれまで宣言されてきた教義が真理であることを証し、またイエスが主であり、救いはイエスの内にあること、さらに私たちが神の王国に救われるのは、天が下イエスの名をおいて他にないことを証する。

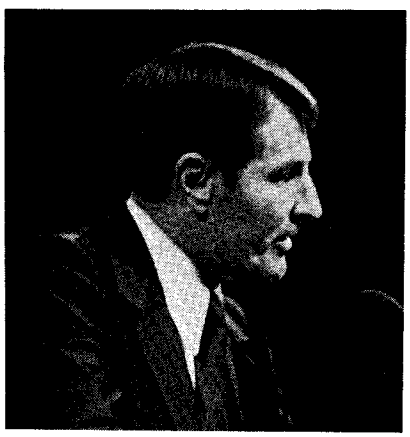
願わくば神が私たちに知恵と先を見通す力と決断力、そして主の軍勢に加わって雄々しく戦う勇気を与えたまわんことを。それはジョージ・アルバート・スミス大管長が鮮かに表現されたように、「主の側に立つ」ためなのである。イエス・キリストのみ名により、アーメン。

1974年10月4日（金）半期総大会午前の部における説教

なぜ引き延ばすのか

事を前に躊躇するとき、「まだ」という言葉は「決してしない」を意味することが多い

十二使徒評議員会補助
ニール・A・マックスウェル



兄弟姉妹たち、私はとりわけ大切な人々のことについて、とりわけ大切な人々にお話したい。それは、いつか教会を信じるようになり、またいつか活発になろうとしている人々、しかし現在はまだそうではない人たちのことである。でも、悪い人ではない。自分がどれほどより良い人になれるかを知らないだけの善良な人々なのである。教会に近くありながら、完全に足を踏み入れようとはしない人たちである。礼拝堂に入りもしないが、玄関を離れもしない人々である。これらの人々は教会を必要とし、教会もこの人々を必要としているというのに、「神を信ぜずに世を」渡っている。（モーサヤ27：31）

私はこのような方々に申し上げたい。ぜひ教会への招きを受け入れていただきたい。あなたを仲間に迎え、あなたの力を借りたいと私たちが待っていることを、ぜひとも知っていただきたい。

今すぐそれを決意しなければならないのには理由がある。時がたち、日が過ぎ、月がめぐるうちに、決意はだんだん鈍るからである。やがてこの地上に起こる出来事は、生ぬるい人の選択の自由を取り上げてしまう。イエスの口から出たみ言葉は自分で制しきれないからである。

どうしてもあなたが今すぐそれをしたくないというなら、次の忠告をしたい。

まわりの快楽信奉者の目をあまり深くみつめてはならない。そうすると、あなたは肉欲の中にいいようのない悲しみを見、放縦な笑いの中にうわべだけのわざとらしさを聞くだろう。

また、神を否定する者の心を深くみつめてはならない。懐疑に対する懐疑

に気がつくだろうから。

人の思いの及ばないことを考えてはならない。なぜならあなたは、神が存在し、神があなたを愛しており、結局は神の愛の手から逃れ得ないという現実に大きな強い力で引き寄せられていく自分を見出すだろうから。

自分が家族に教えていることを、あまり深く考えすぎてはならない。なぜなら、あなたはただキリスト教に無関心のつもりでいても、子供たちはそれを敵意と受け取るかもしれず、あなたが弁護しなかったことを、子供は怒って拒絶するかもしれないから。

酒を飲まないことなどの福音の標準の実際性について、じっくり考えてはならない。なぜなら、各種の統計が覆いかぶさってきて、禁酒こそが中毒の予防にも治療にも唯一最善の方法だと確信せざるを得なくなる。それに、福音の原則をひとつ守ることが、各種のキャンペーンに百従うよりも良いことを知るだろう。キャンペーンは、「沈みかけている船のデッキチェアをまっすぐになおす」ようなことがままあるものである。

また、家庭においては愛が大切であるといったような教義についても、考えすぎてはならない。なぜならあまり考えると、親つきの孤児が多い今の世の中では、歯の根も合わないような現実にゆきあたってしまうだろうから。

また、自分は神の子だという教義について考えてはならない。そう考えるならば、何かのつながりが生じてしまうだろうから。

モルモン経をまじめに読んだりしてはならない。なぜなら、聖なる一千年の歴史から信じがたいほどに重要な時事がその本を埋めていることに、突如として気がつくだろうから。

この世を去るときに持って行こうと思う荷物をぎゅうぎゅう詰めにしてはならない。なぜなら、この世の物の大半は日の光栄の王国の門を通ることができず、携えて行けるのは永遠の事物だけだから。

祈ってはならない。なぜなら、あなたを愛し、祈りを聞いて下さる御父から答えが来るだろうから。

また、現代の世に生ける予言者がいるかもしれないと、考えすぎてはならない。その代わりに、予言者とされている人々が多くの点でどんなに平凡に見えるか、考えるとよい。昔の予言者も言ったこととしたことを除けば、まったく人の目に止まらないありきたりの漁師や天幕造りだったことは忘れなさい。ある人々の信仰のろうそくを吹き消す苦難の風も、あの特別な人たちには、信仰の炎をあおりたてるだけなのだから。

政治、経済、社会に押し寄せる雨風のきざしをかえりみてはならない。戒めを守ることと社会の安寧とが密接に結びついていることに気づくと悪いから。

この地球に住んだ最も聖なる人が、必要な儀式について何と言ったか、読んではならない。そうでないと、彼が自分も含めてひとつの例外も許さなかったことを知るだろうから。

善人にも教会が必要なのかどうかを、聖典で調べてはならない。なぜなら、一人一人の善良さもばらばらでは悪との闘いに効力がないため、かつて生を得た人の中の至善の御方が教会を組織されたのだから。

もしこれまでの私の言葉に気分を害されたとしても、私から聞くまでもなく、たとえ気分を害することがあってもこのことはとうに聞いていなければならない言葉だったのだということは、考えないように。

本来の自分よりもっと良い人間だと装っているように見える教会の人の偽善を、つきつめて考えようとしてはならない。なぜなら、偽善にも別の形があること、つまり本当の自分より低く振舞う人々のいることがすぐにわかるだろうから。

兄弟姉妹たち、もしあなたがキリストとその教会について決心を一寸延ばしにしていたいなら、このようなことを避けるのが得策である。

しかしヨシュアは、自分の仕える者を来年選べとは言わなかった。日のまだ明るいうち、闇が勢いを増してあたりを覆わないうちに、「きょう」選べと言った。（ヨシュア24：15参照）

イエスが最初の弟子たちを召したとき、聖典には、彼らが舟を網を「すぐに」捨てたと書かれている。彼らは、漁の時期がすんでからとイエスに頼みはしなかった。もうひと網打ってから、と返事を延ばしもしなかった。彼らは「すぐに」ついて行った。（マタイ4：20参照）

兄弟姉妹たち、心が信仰に傾いたら、信じたいという望みでも起きたら、行動しなさい。そうすればすばらしいことが起こり始めるだろう。玄関から教会の中に入ったら、音楽がもっとはっきり聞こえるばかりか、歌にとけ込んでいく。

今行動しなさい。これから一千年して、あなたがこの時を振り返って、あれは大事な時だった、大事な決断の時だったと言えるように。

だから、自己と時間を不活発な状態に費やしたことを気にしてはならない。プライドの壁がこれまでの非を認めさせまいとしても気にしてはならない。なぜなら、あとに延ばしたからといって、今より容易には決してならないのだから。

だれでも、へりくだる心と悔いる精

神に伴う感情を知らなければならない。私たちはそれによって、熱い、聖なる特別な恥の炎で清められ、それから神と人とに仕える強く清い力と愛を持てるのである。「甚しくこの世に属けるものの上にある」心は、何よりもまずへりくだることに専心すべき心である。

実に、だれもが自ら演じる一番無残なゲームは、「まだ」というゲームである。やめる前にもう少し罪を犯し、背を向ける前にもう少し世の拍手かっさいを楽しみ、物質主義のものうい賭にもう一度だけ勝ちたいと思う。また、身を清くしよう、しかし今はまだと思い、良い隣人になろう、だが今ではないと思うこと。人はためらいや留保の気持をしばらくはあやつることもできよう。しかしそのあとに、あの一瞬を迎えるのである。にわかに気づいて「信じます。不信仰なわたしを、お助けください」と泣き叫ぶあの一瞬を。（マルコ9：24）

「まだ」がおおかた「ずっとしない」を意味するというのは真理である。キリストに関わることの決定の責任を逃がれようとするのは、大人げない。ピラトはキリストに関して決定の責任を回避しようとしたが、全面的に責任を回避することはできなかった。

私たち一人一人の過去は、今やどうにもならない。私たちは「尊い現在」と呼ばれるものに、集中しなければならない。現在は神聖である。私たちは決して将来に住んでいるのではない。人生の神聖な賜は、常に現在という形を取る。それに神は、このまま行けば必ずや破滅に至る行ないをやめるよう、今私たちに求めておられる。

さて、私たちは世のもつれを断ち切ったときに、休息の宗教、安逸のエデンを約束されるのだろうか。それは違う。私たちには涙と試しと労苦が約束される。しかし同時に、ただ想像するだけでも胸が躍る究極の勝利も約束されているのである。

友人たちよ、私たちには従うべき足跡が残されている。自分は安全なところにいて「あっちへ行け」と叫ぶ指導者ではなく、「わたしについて来なさい」と言う指導者の足跡が。そして、私たちの地上の指導者は、進歩する術を教えてくれる予言者である。

教会の中庭や玄関にいる人々は、「教会の鐘が誰がために鳴るかを聞いてはならない。鐘は汝がために鳴るのだ」（ジョン・ダン *Devotions upon Emergent Occasions*「非常時の祈禱」黙想録XVII）

すべてのひざがかがみ、ことごとくの舌がイエス・キリストは主であると告白する日がいつか来ると感じているなら、どうして今それをしないのか。あらゆる人が告白するそのときには、もはや立ち上がることができずに、ひざまずくことはいわんや当然だからである。

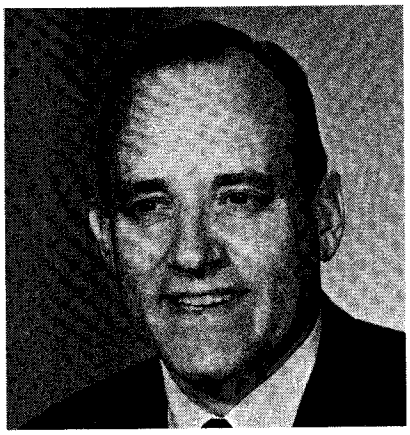
願わくは、世を変えるために私たちが変わらんことを。また、神が私たちすべてのためにその時を早めたまわんことを。イエス・キリストのみ名によりお祈り申し上げる。アーメン。

1974年10月6日（日）半期総大会午前の部における説教

神を知る

神を求めることは最大の探求であり
そのためには信仰が必要である

十二使徒評議員会会員
ハワード・W・ハンター



私たちは再び教会の総大会に共に集うシーズンを迎えた。かつて荒涼たる未開の地であったこの西部の山あいに、初期の開拓者たちが築いた、長い歴史をもつ壮大なタバナクル。私たちはそのタバナクルで現在こうして大会を開いている。そして世界の数多くの国々の聖徒が一堂に会しているのである。この大会衆を前にした眺めは、まことに壮麗である。ある人々はヘッドホーンをつけ、自国の言葉で大会の話を聞いている。私たちが英語で語ると、その言葉は通訳が同時通訳をする。そして私たちは共通の事柄を理解しているのである。

かつてはこのように多国の人々が集まった場で、同時にコミュニケーションを図ることは不可能であった。また、世界各地からこの地に来るのに、現在ではわずかな時間しか要しないが、かつては今日ほど短時間に旅をすることもできなかった。このような近代設備や科学技術の進歩には驚くばかりである。いつも何らかの達成をめざしている人類は、未知の事柄に手をつけ、地の諸元素と自然の力とを征服しつつあるのである。

科学の加速度的な進歩に伴って、現代社会では数々の偉業が成し遂げられ、次いでそれは広く一般の生活へと転用されるに至った。この科学の進歩には驚嘆するばかりである。しかし私たちは、これが自然の法則、すなわち神の法則を応用した結果であることを承知している。数多くの現代科学の産物は、奇跡とも驚異とも思える。また、旧新約聖書中の多くの奇跡にさえ勝っているように見える。しかしこれら現代に発見されたある物は最初は奇跡のようであるが、やがて日常生活に解け込むと、平凡な事物として受けとめられるようになってくる。

人類の知識は急激に増加し、科学の探究は歴史上類のない速さで進んできた。これは、実業界、政府、教育機関が努力を傾注した結果である。世界の富と収益の大部分がこの研究につぎこまれ、全世界の数限りない人々が時間と労力を費やし、探究を続け、科学の知識と理解の取得に励んでいる。人類がいつの時代にあっても、宇宙の法則の知識を追い求めてきたことは周知の通りであるが、この追求は今や新しい段階に到達しているのである。そして真理を求める研究はますますその範囲を広げている。

科学は現代の世界において、人類に安堵と慰めを与える驚嘆すべき事物を提供し、かつてなく生活水準を高く引き上げている。そして人類は生活に必要なすべての物、またぜいたく品をさえ手に入れることができるようになった。だからといって、神や宗教の教え、イエス・キリストの福音から心をそらせてよいだろうか。知識が増すにつれ、人々は科学的に証明された原則にのみ信頼を置くようになった。その結果、同じ方法をもって神の存在が立証されないということで、神を信じない者が出てきた。事実、科学の探究は真理をきわめるひとつの試みである。従って、この追求に用いられる同じ原則を、宗教の真理を立証する探究にも使うことができる。

イエスは山上に集まった群衆に次のように言っておられる。

「求めよ、そうすれば、与えられるであろう。捜せ、そうすれば、見いだすであろう。門をたたけ、そうすれば、あけてもらえるであろう。

すべて求める者は得、捜す者は見いだし、門をたたく者はあけてもらえるからである。」（マタイ7：7，8）

この言葉は、確信をもって捜し、真

理を一生懸命に尋ね求めるようにとのひとつの訓戒であるように思える。これは科学におけると同じように、宗教についても言える。いずれの場合も過程は同じである。必要な資料を調べ、誤りが立証されたものを捨て、明らかになった正しいもののみを残す。この探究に生涯をかけなければならないこともある。

科学の探究が大切であると同じように、神を求めることも欠かせない探求である。すなわち、個性をもった神が存在していることを確認し、御子イエス・キリストの福音を知ること、これは大切な探求である。神について完全に理解することは容易でない。しかし、この探求には不断の努力が要求される。そのために、この知識の追求に腰をあげようとしない人々がいる。彼らは骨折り努力することをいとい、全く逆の道を歩む。何の努力も要さず、神の存在を否定する道を。ある著述家はそのことを次のように述べている。

「音楽家なるものはいる。だが、その数は少ない。音楽の才を欠いている者もいるだろう。しかし大部分の者は音楽に対する興味を欠いているのである。またたとえ音楽の才能を持つ者でも、長年にわたる不屈の努力なしに偉大な音楽家にはなり得ない。偉大な演奏家と言われる人は、国際的な名声をかち得た後でも、練習は欠かさないものである。……たゆみない練習と、長時間に及ぶ厳しい経験がなければ、いかなる者も、抜きんでた運動選手、技術の長けた機械工、熟達した医師、偉大な弁士、高名な弁護士になることはできない。……目を閉じ、耳をふさいだ状態で、自分には音楽家になる才能がないので、音楽家なる者は存在しない、と言うことは何と馬鹿げていることだろう。自分は発明家になれないので、発明家は存在しない。また自分には画家になる才能も興味もないので画家なる者は存在しないということも、これと同じである。この考え方でいくと、自分が神を見出ださなかったからといって神は存在しないと単純に言い切る者は、同じように愚かと言えるのではないだろうか。

「神の存在を知ろうと努力しない者は神が存在していることを、この世においておそらく知ることはないだろう。しかし彼が無知のために神の存在を否定したとしても、正しいとはされないのである。」（ジョセフ・F・メリル *The Truth Seeker and Mormonism* 「真理の探究者とモルモニズム」 P.76 P.77）

科学の真理に関する知識を求めるときにも、神を見出そうとするときにも共に信仰が必要である。これが起点である。これまで信仰は様々に定義されてきた。その中で最も典型的なものはヘブル人への手紙の中に見られる定義である。それは次のような意味深長な言葉をもって与えられている。

「さて、信仰とは、望んでいる事がらを確信し、まだ見ていない事実を確認することである。」（ヘブル11：1）科学者は分子や原子や電子を直接には目にしないが、それらが存在していることは知っている。また、電気や放射線や磁気も目に見えないが、これらが見えない存在であることも知っている。同じように、神を熱心に求める者は、神を直接に見なくても、信仰によって神の存在を理解している。これは希望以上のものである。信仰は確信、すなわちまだ見ていない事実を確認することである。

ヘブル人への手紙の筆者は続けている。「信仰によって、わたしたちは、この世界が神の言葉で造られたのであり、したがって、見えるものは現われているものから出てきたのでないことを、悟るのである。」（ヘブル11：3）信仰とは、世界が神の言葉によって造られたことを信じること、すなわちその確信を持つことであるとここに述べられている。この事実に対しては証人を立てることはできない。しかしこの信仰から、私たちが他の驚嘆すべき事物や自然の中に見る万物は神によって造られたことを知ることができるのである。まだ見ぬ神の存在、文字通りの復活、霊にかかわる奇跡、これらを信じることは、自然科学の分野における発見を信じるのと同じ位道理にかなっている。信仰は宗教の領域においても、科学の領域においても、共に第一に大切なものなのである。

キリストはこの世で導きと恵みを施しておられたある日、神に関する真理を知るにはどうしたらよいかについて、次のように説かれた。「神のみこころを行おうと思う者であれば、だれでもわたしの語っているこの教が神からのものか、それとも、わたし自身から出たものか、わかるであろう。」（ヨハネ7：17） 主はまた、御父のみこころと、大切な戒めとについて次のように語っておられる。「心をつくし、精神をつくし、思いをつくして、主なるあなたの神を愛せよ。」（マタイ22：37）神のみこころを行ない、神の戒めを守ろうと努める者は、御父について証することが主の務めであり、神がその業を認めておられることを、個人的な啓示によって悟ることであろう。

理解を得たいと望む者にそれがどのように与えられるかについて、次のようなヤコブの言葉がある。「あなたがたのうち、知恵に不足している者があれば、その人は、とがめもせずに惜しみなくすべての人に与える神に願い求めるがよい。そうすれば、与えられるであろう。」（ヤコブ1：5） 明らかにヤコブのこの言葉は、科学の分野に

ついて語ったものではない。これは天から下される啓示について語ったものである。この啓示は、この訓戒に従ったときに、その人の問いに対して答えを与えるものである。

主の次の言葉をよく聞いていただきたい。

「主かくの如く言う。主なるわれはわれを畏るる者に恩恵と憐みとを与え、終りまで義しく且つ真実にわれに仕うるものに誉を与うるを喜ぶ者なり。」

続いて、終りまで義しくかつ心から主に仕える者に次のような約束が与えられている。

「彼らの得る報いは大きく、その栄は永遠なるべし。われは彼らにすべての奥義、すなわち昔より今に至り、またこれより永き未来にわたるわが王国のあらゆるかくれたる奥義を知らしめ、わが王国に就けるすべてに関するわが旨を知らしめん。

誠に永遠の驚異をも彼らは知らん。またやがて起るべきこともわれ彼らに示さん。すなわち多くの代のことを彼らに示すべし。

而して、彼らの知恵は大いなるものとなりてその覚(さと)りは天に届かん。彼らの前にはすべて賢き者の知恵も滅し、慎み深き者の覚りも物の数ならず。

そはわが『みたま』によりて彼らの覚りを開き、わが能力によりてわが意の秘密を彼らに知らしむればなり。すなわち、誠に人の眼いまだ見ず、人の耳いまだ聞かず、人の心にいまだ入らざるものをも知らしむと。」（教義と聖約76：5－10）

このように私たちには、神を求める際の定則と、その探求を成し遂げるための手段がある。信仰、愛、祈りがそれである。科学は確かに人類のために驚くべき成果をあげている。しかしそれは、人が独力で行なわなければならない事柄、すなわち神の実在を知るという最も大切な事柄までは介入できない。そうすることは容易でなく、その苦労は少なくない。けれども主が述べておられるように、「彼らの得る報いは大きく、その栄は永遠なのである。」（教義と聖約76：6）

私には、神が実在の御方であり、現在生きておられるという強い確信がある。神は私たちの天の父であり、私たちはその霊の子供である。神は天地を、そして地上にある万物を創造された。また神は、宇宙を支配する永遠の法則を定められた御方でもある。人は探求を続けることによって、少しずつこれらの法則を見出しているのである。これらの法則はこれまで常に存在してきたし、今後も永遠に変わることなく存続するであろう。私はイエスがキリストであり、生ける神の御子であり、救い主、贖い主であることを証申し上げる。イエスは、贖いの犠牲を捧げて、全人類に永遠の生命を与える道を備えられた贖い主である。霊性をさらに高め、神を知り、神を見出し、神に仕えてその戒めを守ろうと決意できるように。主が私たちにそのための望みを恵みたまわんことを。これらのことをイエス・キリストのみ名によってへりくだって祈る。アーメン。

沖縄の名嘉姉妹

NHK「青年の主張」全国コンクールに!!

〝あっ、テレビになつかしい顔と声が……〟

川崎支部
岩本則子

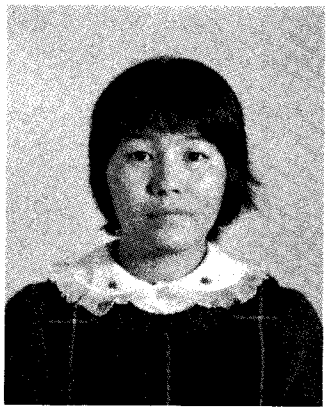
1月15日成人の日に私は川口にある実家へ行き、テレビを通して家族全員が霊的な一時を過ごすことができた。母は毎年NHKの青年の主張コンクールを楽しみに見ているが、今年はどうしたわけか父も兄も外出せず、久しぶりに里帰りをした私たち夫婦とそろってテレビの前に集まり、この番組を見ることになった。

出場者の紹介があったとき、私はハッとした。沖縄、名嘉ふみえ……沖縄の人は似た名前と顔の人が多い、まちがいかもしれない。そうは思ったが祈るような気持で彼女の発表の番が来るのを待った。カメラが大写しになり、彼女の澄んだ声が聞こえてきた。なつかしい快い響きだった。「私たちは、今一度、人間とは何かという最も基本的な原点について考えるべきではないでしょうか……。」彼女のその主張の声を聞いたとき、私の心は燃えた。

発表が終わった後、永井文部大臣が、今年の青年の主張は最後に発表した名嘉さんの「人間とは何か」という基本的な問いかけに代表される、というようなことを話された。「あの名嘉ふみえさんは、私が沖縄で伝道していたときにバプテスマを受けた人よ」とはずむ心をおさえて私が言うと家族のみんなも興味をもってあらためてテレビをのぞきこんだ。審査の発表までかなりの間、私は二階の部屋に行き、ひとりで静かにお祈りした。「ひとりでも多くの人々が人間とは何かについて考え、神様のことを思い出すことができるように。福音が世に広く知られるなかだちとして彼女の経験を役立てて下さい。審査員の方々にキリスト様のみたまがありますように。」

このあと沖縄に手紙を出すとすぐ返事が帰ってきた。霊的にも成長した彼女、伝道の経験を永遠に忘れることのできないすばらしいものに飾ってくれた沖縄の子供たちの清らかな心が、なつかしくよみがえってきた。彼女の手紙を読んだとき、神様への感謝と喜びがしみじみと胸に湧いてきた。思えば何もわからない新米の宣教師として沖縄に転任していったとき、初めてのバプテスマ会で彼女のお姉さんのゆり子姉妹がバプテスマを受け、半年の伝道の最後のバプテスマ会で妹のふみえ姉妹がバプテスマを受けたのだった。主のみたまにより共に学び合った同僚や求道者の方たちが今も元気に証をもって成長しておられる様子を見聞きするたびに、私の胸には、平安と喜びが満ちあふれ、これこそ他のいかなるものにも代えることのできないすばらしい宝ではないだろうかと思うのである。

私の身は聖霊の力でふるえた



那覇支部
名嘉ふみえ

〝末日聖徒〟であることを心から感謝します。お父様の愛といつも大きな祝福を受けていますので心から感謝します。

1月15日、それは本当に素晴らしい日でした。私はずっとお父様と聖霊と一緒でした。みたまの導きをはっきりと感じることができたのです。断食し、沖縄を出発するとき、祝福してくれた屋冨祖支部長の言葉がお父様に聞き届けられるように祈りました。また、この話を聞くすべての人々が心に強くみたまを感じるようにと——。

ＮＨＫのあの大きなホールでお父様は、私の口を、私の文章を通して御自分で、それを話されたのです。私は聖霊の力で身がふるえ、気を失ってしまいそうになったのを今でもはっきりと思い出すことができます。

お父様のことばを聞いた多くの人々は涙を流されました。感謝の気持でいっぱいでした。そして同時に、私は天父の偉大な力に驚きを感じずにはおられませんでした。

沖縄に帰って、いろいろな人達から激励の手紙やお電話をいただきました。

それは、未熟な私の文章にではなく、すべてお父様の力に感動した人々の便りなのです。この素晴らしい経験を通して、お父様はもっともっと私を霊的に成長させて下さいました。そして、お父様は、特別に私を愛して下さるということを教えて下さいました。また、私がただ偶然に末日聖徒になったのではないことを示して下さいました。

心から感謝の気持でいっぱいです。お父さまの娘としてみこころのままに生活し、みもとに帰りたいと思います。

すべてイエス様のみ名によって証しました。アーメン。

――以下はコンクールの発表文です。――

青年の主張『私の訴えたいこと』

沖縄県　名嘉ふみえ

「わたしはびっくりした。いや、びっくりというものではない。それは恐ろしいという印象のほうが強かったように覚えている。

入った途端、わたしの目に写ったものは、顔の色も体の色も目の輝きまで何かしら一種独特の光を帯びた子ども達の姿であった。可愛い盛りなのにヨダレを垂らし口をきくことさえもできないのだ。赤ん坊のようにはいつくばいながらすがりついてくる子ども達。わたしは、生まれてから一度もあのような光景を見たことがない。あまりの痛ましさに思わず顔をそむけてしまった。こんな悲惨なことが事実として現代社会にも存在しているのだ」

これは、わたしが初めて養護施設を訪問した時の日記の抜粋です。

初めて見るその姿と想像以上の悲惨さに、とまどい、あるいは不安を感じずにはおられませんでした。けれども、わたしがそれら以上に驚いたことがありました。それは、彼らの実に生き生きとした姿であり、人間性。そして何よりも子ども達の勢いっぱいの生き方だったのです。つぎつぎに押し寄せてくる苦しみのなだれをまともに受けながら決しておしつぶされないその力強さ。何物にも比べようのない純な心。彼らには彼らなりの魂や精神、感受性があるのです。肉体的障害をのりこえて生きる大きな力があるのだということを、子ども達のあの目を、あの手を通してわたしは教えられました。

また、彼らは他の誰にも経験できない数多くの喜びをこのわたしに与えてくれたのです。子ども達の花を見る目。虫を愛する姿。新しい物を見つけた時のこぼれるような輝き。彼らと接した時のわたしの感動はいつも限りないものでした。時には、生まれて初めてほんとうのものを見、ほんとうの姿にふれたような気さえするのです。そんな時、真の価値観とわたし自身のより生きることのすばらしさを学ぶのでした。

また、わたしは機会があって身体障害者が社会復帰するための実習を見学することができました。身障者が自信に満ちた態度で黙々と働いている姿。その時の感激もひとしおです。彼らの底ぬけの明るさ、おひとよしさが体全体から滲み出ており、その質素な服装からもダイヤモンド以上の輝きとなって発散されていたのです。大きな試練の中で身障者のみせたごまかしのないひたむきな生き方と愛あふれる人柄に、苦しみを知った真の人間の姿を見たのです。彼らの人間性といどみの姿勢は必ず身障者の大きな軸になっていくことでしょう。

けれども、こうした真剣な生き方にもかかわらず、彼らの心を痛めるものがあります。それは、差別であり、偏見であり、身障者に対する無理解の波なのです。

「身体障害者に愛の手を」と各地でキャンペーンが行なわれています。これは、決して「身障者に同情しろ」というものではありません。「正しい理解をしてほしい」とこそ願っているのです。ただ同情だけで「かわいそうだ、かわいそうだ」の連発だけで、あの子達が浮び上がるでしょうか。彼らは人を悪くいったり、世の中を恨んだりはしません。しかし、彼らの心の内はどんな言葉でもどんな文章でも表わし得ない苦しみがあるのでしょう。

人間がうわべだけで評価される現代。わたし達は今一度「人間とは何か」という最も基本的な原点について考えてみるべきではないでしょうか。彼らはみせものではありません。しかし、社会の片すみに同じ人間が生活しているという事実を忘れてはいけないと思います。

わたし達は、彼らの苦しみを取り除いてやることはできません。しかし、彼らが歩む道を、彼らが生き抜く道をより歩みやすいものにしてやることはできると思います。いえ、やらなければならないのです。

わたしは、「僕達は人間なんだ。僕達にだって人格はある。生きる権利はあるんだ」と訴える子ども達や働く訓練を受けている青年達を思いながら、「身障者を理解してやろう」と叫び続けたいと思います。（原文のまま掲載）

私はこのような心で地域総大会に備える!!

日本横浜ステーキ部
宮下阿佐夫

大会といえば1970年のソルトレークを思い出す。教会員として1年半の私たち夫婦が今まで、特に大きな過失もなくやって来られたのは、神殿参入と指導者たちの圧倒的な霊性から受けたスピリットであったろう。以後たくさんの指導者が日本を訪問され、ステーキ部大会や特別のファイアサイドで私たちを導いてくださった。

あゝ、あの十二使徒はタバナクルではこのように話してくださった。この使徒はソルトレークでこのように振舞っておられた……。私たち夫婦の信仰の礎はまさに1970年のソルトレークにあったのである。

あの感激、あの熱っぽい雰囲気、主が身近にいてくださるというあの実感がまた8月に味わえる。私は今、大きな喜びと、指導者が伝えんとしておられるメッセージを100%受け入れるべくアンテナの整備に心をくだいている。思えばソルトレーク訪問に関しては、数ヵ月も前から、霊的準備ということで（もちろん神殿参入という最大の目的のためもあったが）

(1)、他人の陰口、悪口を言わぬこと。
(2)、不平をこぼさないこと。
(3)、教会の集会に準備して出席すること。
(4)、聖典および参考文献を読むこと。

等が勧告され、戒められた。

私たちの一生の間でそんなにたくさんはないであろうこの機会をほんとうに大切にしたいと思う。そして1970年の準備以上に整えてその時を迎えたい。

1、毎朝聖典を読み、汝、お前、あなたと書かれている個所を自分自身におきかえ、考える。
2、毎月、毎週、毎日のスケジュールをよく調整し、「むり、むだ、むら」を省く。夫、父親、ホームティーチャー、社会人、よき隣人たるべく努力する。特に上述(1)、(2)を守る。
3、聖徒の道を読み直し、指導者別のリストを作っておく。訪問される使徒がわかったらリストに従って読み直してみる。
4、地上で最も気高い人々と会える機会を両親、友人、近所の人たちにも与える。そのために生活を整え、福音を実践することにより得られる喜びを素直に伝えられるようにする。

私たち夫婦は以上のような目標をたてて、来たる日のために準備を始めた。

日本東京ステーキ部
岡本　亮

「全然興味がないんです。私は結構です！」これは私が祈りの気持をこめて出した地域総大会の招待状に対する返事でした。私の心はちょうど聖文にあるように「主はあたかも捨てられて心に悲しむ女のごとく、またとつぎて出されたる時なお年若き妻なりし者のごとく」（Ⅲニーファイ22：6）に傷ついてしまいました。一瞬消極的な考えが私の心をかすめて次のようにささやきました。「3日間も長ーい集会、難しすぎて一般向きしない。自分だけでよいのではないか。」このような消極風に負けそうになったときに、ふとひとつの考えがひらめきました。「少し待てよ、彼はモルモン教会のことを知っているのだろうか。」「いやいや彼は知らないからそのように言うのだ。私は彼にあまりよく説明していなかった。」すると本箱の上の段から一冊の本が私に話しかけるように見下ろしているのに気がつきました。それは「回復された真理」でした。「私はこの本に書かれてあることを自分の言葉で自分の字で伝えよう。」早速文房具店で便せんと封筒を買い、紹介№1を書きあげました。8月までに12回の紹介文は書ける！

すべてはこれからである。負けたために心が謙遜になりました。ヤコブの言う通り「低くへりくだるのでなければ神は彼らに門をお開けにはならない」（Ⅱニーファイ9：42）のです。また、もし失敗するようなことがあってもイザヤの言葉の通り「われはいたずらに働き、益なく空しく力を費した。しかしまことに……わが働きはわが神が知りたもう」（Ⅰニーファイ21：4）のです。

私はポストに向かって小走りに歩きながら考えました。「私の心は再び希望と確信に満ち溢れているではないか。」詩篇に書いてある通り「主はすべて倒れんとする者をささえ、すべてかがむ者を立たせられる」（詩篇145：14）のです。

1押し2押し3に押し。「神の国は言葉ではなく力である。」（Ⅰコリント4：20）

ブラジル、サンパウロに ラテンアメリカ初の神殿

完成予想図

2月28日から3月2日まで、ブラジルのサンパウロで開催された地域総大会において、大管長会はブラジルの聖徒たちに対し、ラテンアメリカ初の末日聖徒の神殿建設を計画していると発表した。

この神殿はブラジルのサンパウロ市内、ブタンタ地区フランシスコ・モラト教授街の北側に建設の予定である。着工は1975年末、完成までには1年半を要する。

スペンサー・W・キンボール大管長はブラジルをはじめ南米諸国における教会の伸展が目覚ましいため、この地に神殿を建てることになったと語った。

サンパウロの神殿は南米の教会員たちが利用する。南米の教会員数は約14万で、その内4万以上がブラジルに住んでいる。なお南米の教会員数は過去5年間で、4.5倍以上になった。

キンボール大管長は神殿の業は3つに分けられると語った。その3つとは、すなわち水に沈められるバプテスマ（生前正しい権能のもとにバプテスマを受ける機会のなかった先祖たちやその他の人々のために、現在生きている者が代理で受ける）、地上に来る前、地上、そして死後の生活、すなわち人間の永遠の旅路について教えるエンダウメント、神権の権威によって執り行なわれ、死後も永遠にわたって効力のある結婚である。神殿の祝福を受けた後、教会員はたびたび神殿に行く。神殿の儀式を受けることなく世を去った死者たちの代理として、エンダウメントや結婚の儀式を受けるためである。サンパウロに建つ神殿は教会建造物設計者エミール・B・フェッツァーによって設計され、教会特殊建造物設計部で検討が重ねられた。

教会は1年前5.5エーカー（2万2000平方メートル）の土地を購入したが、その内1.5エーカー（6100平方メートル）が神殿用地として使われ、残りの部分にはステーキ部センター、訪問者センターほか、多目的な用途の建造物が建てられる予定である。

神殿の外装にはイタリアの白大理石が使われる。この建物は平面積2万平方フィート（約1800平方メートル）で入口の真上に塔がそびえている。塔の部分はつやのあるタイルで蔽われ、その先端には24金の箔が被せられる。また、窓はステンドグラスと防錆処理を施した青銅の装飾格子で飾られる。

庭園には噴水や歩道が設けられ、かん木や花が植えられる。

神殿の中には儀式を行なう部屋がふたつ、天における最高の光栄の義の原則を表わした日の栄の部屋がひとつ、結婚の結び固めの部屋が4つ、バプテスマの部屋がひとつ設けられる。そこにはイスラエルの十二支族を象徴する12頭の石造の雄牛が背負ったフォントが置かれる。

またこのほかに、レセプションの部屋、事務室、神殿参入者更衣室（神殿内に入る人々は白の神殿着を着る）、花嫁更衣室、神殿職員のための台所と食堂、洗濯場、幼児室なども設けられる予定である。

メルビン・J・バラード長老がアルゼンチンのブェノスアイレスに伝道本部を設けて以来約半世紀、教会は南米各国に紹介され、今日では15の伝道部、18のステーキ部があり、500以上のワード部、支部がある。ちなみにブラジル国内だけのワード部、支部数は150である。

聖 徒 の 道

1975年 4 月20日 発行（毎月 1 回20日 発行） 第19巻第 4 号
昭和42年12月18日 第 3 種郵便物認可